
『翼～』番外編**君に降る雪**

月森うさこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『翼』 番外編**君に降る雪**

【Nコード】

N6691I

【作者名】

月森うさこ

【あらすじ】

翼、あるモノ。の番外編です。

現在載せてる本編の4〜5年くらい前って設定の話。

ある村で暮らすマナは、4歳の時に雪山で養父ナギに拾われる。

ナギの仕事は『山護り』

ナギを尊敬するマナは、自分も役に立ちたいと思い、

その夢を叶える為の努力もしてきたマナに、ナギは最後の試練として、

「十年間、雪の降らない山に雪を降らせる」の課題を出した。

住んでる村から、少し離れた村の山に向かう途中、ラヴィと出会う。
雪を降らせたいと言うマナだが、ナギの課題には実は別の理由がある。
……。

君に降る雪

吹き荒ぶ、冬の嵐。

山は往々しく自然の偉大さ、厳しさを見せつける。

たった四つの子供が、その中に居た。

「名前は、言えるかい？」

かじかんだ小さな手を包み込む。

凍える唇が、微かに動いた。

「……マナ」

風に、雪に、消し飛んでしまいそうな声。

なのに、瞳に宿る光は、間違いなく——生きたい、そう言っている。

包み込む手は、強く、しっかりと握り締められた。

「マナ…行こう、私と共に生きよう」

——その日が来るまで、私はお前の側に居るよ、マナ。

*** 君に降る雪 ***

「……あ」

今日、五軒目の農家を訪れる途中、小休止していた雪がまた降り始めた。

「ぬぬぬ抜けないっ……ここ道変ですよっ、急に深みに入ったり」

《……オマエさあ、身軽なわりに鈍クサイよな》

一面が雪景色の地。

ひっそりと集落を構える農村地帯。小さいとはいえ、隣家には普通に歩いて数十分はかかる。

「新雪つて、深さが分かり辛いんですよっ」

すっぽり嵌った右足の、ブーツを掴んで引っ張り上げる。

《オレ様の炎で溶かしてやってもいいぞ？》

「駄目ですよっ、自然の摂理に反しま……すっ………抜けたっ」

《大袈裟なっ、ちょこちょつとこの辺り溶かすだけじゃん?》

「ダメっ、絶対ちよこぢやないし…それに誰かが見てたら説明も大変なんですから」

コートのフードを被り直して、カバンを手に再び歩き出した。

《見てるって、誰が何処にいんだよ、見渡す限りが雪……ってアレ?》

「ジン?」

「馬鹿ラヴィ、人間発見したぞっ」

「悪い事は言わん、今日はやめなされ。これからもつと吹雪く、山は荒れてるだろうよ」

「分かってます、だから行くんです。吹雪いてなくちゃ意味がないの」

「あんたみたいな娘さんが、あの山に何の用が。遭難するのが落ちじゃよ」

「おじいさん…有り難うございますっ、お世話になりました」

引き止める村人の親切は充分に理解している。

それでも一日でも、一步でも早く進みたい。大手を振って、彼女は歩き出す。

（山はもう目の前——絶対に諦めないんだからっ）

雪を踏みしめる様に歩く彼女の後姿を、村人は後悔しながらも、高齢で足も悪く追う事はかなわない。ただ深い溜息と共に見送るしかなかった。

「すつすみませーん……こ、こんにちはっ。そこのおうちの方でしようか？」

背後から、息を切らして話しかける声に、少々驚いて村人が振り返った。

「初めまして。僕ラヴィ・クラフトって言います。お伺いしたいことがあって」

「何じゃ今日は、こんな寂しい村にまた旅人かい」

「また？…そう言えば、もう一人いらっしやいましたよね」

ラヴィの問いに、村人は振り向いて両の目を細める。

「居たよ、さっきまでな。でもこの雪の中、あの山に登るって行っちゃった」

「山…ええっ！？登るってこれからですかっ？」

「いくら止めると言っても聞かんな。お前さんくらいの年端の娘

さんじゃったが」

「女の子が、一人で？無茶ですよっ、僕ちよっと思行って止めて来ますっ！すみませんがカバンを預かって下さいっ」

「氣い付けてなっ、温まるモン作って待ってるでなっ」

彼女の踏んだ雪の後を借りる様にして、ラヴィが後ろ手に手を振り、後を追った。

n e x t

君に降る雪

「氣い付けてなっ、暖まるモン作って待ってるでなっ」

彼女の踏んだ雪の後を借りる様にして、ラヴィが後ろ手に手を振り、後を追った。

《相変わらずのお節介バカだな》

「ジンまだ居たの。寒いの手手って言ってた割に…あ、もしかして僕の心配？」

ラヴィの被っているフードの中からひょっこり顔を出すのは、先程から口悪く話し掛ける、彼の支配する精霊の一つ——火の精霊。名をジンと言った。

《ばっ…何でオレ様がお前なんぞの心配をつ、そーじゃないだろ、お節介だつて言ったんだっ》

「お節介じゃないよっ。確実に遭難か最悪命を落とすでしょ、このままじゃ」

《どー違うんだ…まあ勝手にしてくれ、オレ様はもちっとココで寝る》

再びフードの中に忍び込む、手の平に乗る程のオレンジ色した精霊は、トカゲとも鼠ともつかない、不思議な形容をした生きモノである。

「どーぞ、好きに。髪は引っ張らないでねジン」

雪は膝下まであるが、追うのはすでに道が出来ている為以外に容易かった。

すぐに彼女を見つucker事が出来たラヴィは、ありったけの声で呼び止める。

「止まって下さーいっ！…止まってーっ、その人ーっ！…」

吹く風は追い風。聞こえている筈なのに、わざと無視しているのか、全く止まる気配は無い。

「その貴方ですっ、お願いですからっ止まって下さいっ！…」

逃げている様にも見えるくらい、彼女の足取りはどんどん速くなるが、追うが早く、ラヴィはあっという間に彼女の腕を掴み取る事が出来た。

「——待って下さいっ」

両手でしっかりと、しがみ付く様にして彼女の歩みを止めると、振り向きざまにキッと睨みが飛んできた。

「あのっ…すみません。でも山へ行くのは危険です、戻りましょうっ」

「イヤ」

一言。そのまま、また無理矢理に歩き出す。

「駄目ですってっ！どんな理由があるのか知りませんが、命あつての事でしょっ？お願いですから僕と一緒に――」

強引に突き進もうとしていた力が、ふっと抜けて動きを止める。

「そんな事は百も承知なのよっ、知りもしないで分かった様な事言わないでよっ…！」

「ごめんなさい、ですがどうか僕と一緒に戻って下さい」

深々と頭を下げる自分と同じ年齢くらいの少年に、言い知れぬ罪悪感にさいなまれる。

「――なんで、あたしが…っ」

こんな気持ちにならなくてはならないのか。

今初めて言葉を交わしたばかりの、名前すら知らない人の所為で、これでは自分がまるつきり悪人の様ではないか。

「戻りましょっつ、ねっ？」

「何のつもりよっ？有り得ないっ、見ず知らずの人間が何で頭まで下げるのっ？偽善者振ってんじゃないわよっ」

踵を返す彼女に、再びしがみつく。

「離しなさいよっ」

「偽善者でいいです…でもこの手は絶対に離しませんからっ」

厚手のコートを着ているが、どう見たって自分よりは華奢な彼女に、ズルズルと引き摺られるなんて情けないと思うが、彼女の力は想像を超える強さだった。

「わああっ」

それでも、バランスを崩して雪に顔から突っ込んでも、何とか手だけはしっかりと彼女を掴んでいた。

「——お人好し…馬鹿じゃないの、あんた」

「……あ、い。ずびばせん」（はい、すみません）

「ほら」

腕を持ち上げられて、立ち上がる。真ん前に微笑む彼女が居た。

「……女のあたしが言つのも何だけど、あんたもうちよっと肉付けた方がいいわよ」

「はい？」

「だって小枝みたいじゃない、あんた」

「こえ…は、ははは…はあ、すみません」

「謝ってばかりだし」

「はぁ…」

「——ぷっ」

情けない返事を返すラヴィに、今度は吹き出して笑う。

「やだっもうっ…可笑いっ、頭と鼻にずっと雪乗っけてるんだもんっ」

そう言うと、彼女は笑いながら頭の雪を払って、人差し指で鼻にも付いた雪を拭い去る。

「可愛い顔が台無しよ？」

「——って、僕男ですっ…こ、こんなのでモ」

「ごめんごめんっ。……あゝあっ、もういいわ、戻りましょう今日は」

「本当につ？…よ、良かったゝあ」

安堵の溜息を付く彼を見て、何処かで少しほっとしている自分が居ることに気付く。

「……ねえ、名前…まだ聞いてないわ」

「あっ、でしたね。ラヴィです、ラヴィ・クラフト」

「あたしはマナ…マナ・キャンベルよ。宜しくね、こ・え・だ君」

「レヴィですっ、レヴィっ」

n
e
x
t

君に降る雪

「イエティ…ですか」

「うん。…もつつ手がかじかんじやって、ブーツが脱げないっ」

先程の農家に戻り、濡れたコートを椅子に掛けると、暖炉の前にしやがみ込むマナがブーツの紐をぎこちなく解き出した。

「イエティを見付けてどうするの？」

見兼ねたラヴィがマナの靴紐を解き、ブーツを脱がせると、暖炉の前に置いた。

「ありがと。どうするのって、決まってるでしょ捕獲するのよ」

隣の部屋から、温かいスープの匂いがしてきて、マナは鼻を利かせる。

「ラヴィ、おじいさんのスープね、とっても美味しいんだよ」

「……マナ、イエティを見た事は？」

「無いよ。それより、ねえ早くコート脱いじやいなさいよ」

「待って下さい、雪男ですよ？どーやって女の子が捕まえるって…大っきいんですっ、力だって凄いし、無理ですっ」

「お腹空いてきちゃった」

「聞いてくださいよーっ」

暖炉の側で背中を丸めて座るマナは、ぼんやりと燃える火を眺める。

「マナ…っ」

後ろに居る彼を見るでもなく、首筋で揃えられたハチミツ色の髪を、何度も耳に掛ける仕草を繰り返し、ようやくボソボソと話し出した。

「……他に方法知らないんだもん、雪を降らせるにはイエティが要るの」

「雪を降らせるって…何処に？」

天候は吹雪になって、外では強い風と雪が小さな窓を何度も叩く。

「あたしの村がある山に。もう十年降ってないの」

「——マナ、それじゃ要領を得ない。何故そうする必要があるのかを話してもらえませんか」

「何それ。話してどーなるのよ、ホントお節介よね」

少しムツときて、マナは吐き捨てる様にラヴィに言う。

「心配だから、放って置けないんです。それだけじゃ駄目ですか？」
するとやっと少し、頭をもたげて視線だけをラヴィへ向けた。

「ラヴィには関係ない」

一刀両断。今度はバツサリと切り捨てた。

暫し無言のまま時が流れ、薪のパチパチという音と、風が叩く窓の音だけが聞こえるが、スープを運んで来てくれたおじいさんが、この何ともし難い重い空気を和ませてくれた。

「ほら、あつたまるでえ、食べなさい」

おじいさんの親切に二人は礼を言いい、マナは立ち上がって椅子に腰掛けるとスプーンを手にする。

「……ごめん、ラヴィ」

ぼそり言うつと、いただきますと続けてマナはスープを口にする。

立ち竦んだままのラヴィは、俯き何かを考えていた様だが、不意に顔を上げて彼女の名を呼んだ。

「僕、——僕が降らせるよ」

ガチャンっ、とスプーンを皿に落とす。

「何それ？飛躍し過ぎ、ラヴィあのね」

「方法はあるよ。雪は降らせられる」

「ちょっと待ってよ、確かに言い過ぎたのは認める。でもだからってね」

そんなすぐにバレてしまう様な嘘を付いてどうなるのだ？と、マナは呆れて首を傾げた。

「本当は理由、知りたいけど…話せないなら構いません。イエティを諦めてくれるのなら手伝います」

「……冗談、でしょ？」

「本気ですよ」

大真面目な表情のラヴィに、マナは訝しげにそれを見ていたが、やあつて吐息を漏らした後、声のトーンを一つ下げて訊ねた。

「——方法って、どんな？」

「精霊の力を借りて降らせるんです」

「ふつ。やだもうつ、やっぱり冗談じゃない。精霊なんて高度な召喚が子供に出来る訳ない…で、しょ………؟؟？」

「マナ？」

口をパクパクさせて、声にならないといった顔でマナはラヴィに向け、指を指す。

「僕が？何？」

訳が分からず、ラヴィも自分を指して眉をひそめる。

《——阿呆か。どーやらオレ様が見えるらしいな、あの娘っ子》

アクビをしながら、フードの中で眠っていたジインが、ラヴィの髪をツンツン引っ張る。

「そうなんだ」

《そうなんだ。って、ユルイ返事返してる場合じゃねえだろっ、馬鹿ラヴィっ》

「いたたっ、痛いって。髪引っ張らないでよっ」

「……ラヴィ、それって…精霊、よね」

一歩だけ歩み寄り、マナは彼の頭の上に乗っかる精霊、ジインをまじまじと見る。

「ええ。僕、精霊使いなんです。因みにコレは火の精霊でジインて言います」

《コレとかゆーなっ！コレとかっ》

尻尾の様な物でラヴィの額をぺしぺし叩いて、頭に噛り付いた。

「痛いってばもうっ。頭に乗るの禁止にしますよっ、ジインっ」

「……かつ、かわいいっっ」

「え？」 《ナヌっ？》

n
e
x
t

君に降る雪

「お願いっ、もう一回だけでいいから触らせて〜っ」

《ヤなことだ》

「ケチ…けちけちけちけちっ…ジイのドケチっ」

《ドケチって——お前、オレ様を連呼でケチ呼ばわりした上に、ジイってなんだっ！勝手に略すなっ名前をっ》

「ええーっ、可愛いじゃないジイって。ねっ、ラヴィ？」

「可愛くは…いえ、はい…可愛い、かなあ…ははは」

《馬鹿ラヴィっ、そのユウジュウフダンが自分の首絞めてるって、気付けよっいい加減っ》

尻尾もどきが顔面をぱちんと叩いた。

「痛っ…何それっ、僕に矛先向けないでよっ、だいたい嫌なら還ればいいじゃないかつ、ジインのバカっ」

翌日、吹雪は止んで太陽が顔を出した。

早朝から一宿一飯の恩義に、積もり積もった屋根の雪掻きをしてから、ラヴィとマナはおじいさんの家を後にした。

それから、かれこれ数時間が経過し、やっとの事で雪の少ない大きな道を見つけて、乗合馬車が通り掛るのを向かう方向へ歩きながら

待つ事にした。

「ねえ、お腹空いてきたんだけど、ラヴィ何か持ってる？」

《つか、お前さつき食ってたろーがっ、コイツの分までガツガツと》

「さっきって何時よっ？見て空っ、太陽がもう傾いてきてるんだから」

《旅してんだぞっ、ちょっとぐらい我慢しろっ！オカッパ娘っ》

「オカッパですってえゝっ!？」

(……………あああ)

また始まった。

ラヴィは溜息を付くと、カバンを地面に置いた。

「——マナ、ジン」

この二人は仲が良いのか、悪いのか、朝からずっと口を開けばこうなのだ。

「二人ともっ…はっきり言って、五月蠅いですっ!！」

珍しくラヴィが本気で怒っていることに、ジンとマナは目をまん丸にきよとした。

《…オモシロイ》

ジンが正面に回って、まじまじと彼を見た。

「——ジンっ」

目を閉じて、眉間にシワを寄せる彼にニンマリ笑う。

《おおっ、見える見えるっ、ラヴィの頭に怒りマーク…キチョウだぞ、コレは》

マナも彼のことは、お節介で温厚な人物イメージが固まりつつあっただけに、ちょっと驚いて黙って様子を窺う。

「……ふ。いいんですね？ジン・ジークハイド・アクライネ」

《え…おいおいっ、コラッ卑怯モノっ》

支配される精霊にとって、名を正しく詠まれる事は絶対服従を意味する。

《お前何かオカシイぞっ？……あ、そっか新月だ、今日》

「シンゲツ？あっ、お月様のことね」

首を傾げたマナが自問自答する。ラヴィは言われてみればそうかと指を折りながら溜息を付いた。

「お月様がなくなっちゃうと機嫌が悪くなるなんて…なんか…ねえ？」

《だろ？コイツは特別ヘンテコリンなんだ…やーいつヘンテコラヴィッ》

「——もうっ、とにかくっ！喧嘩はしないで二人とも仲良くして下さいっ、いいですねっ！？」

「《あー、はいはい》」

二人同時に返事を返す。ほんとに気が合うんじゃないか？とラヴィは思ったが、また揉められても困るので言わないことにした。

「じゃ、少し休憩を取って何か食べましょう、マナ」

「やったー！」

さっきまではダラダラと歩いていたのに、さっさと腰を下ろす場所を見つけて、マナがラヴィを呼んだ。

《あいつのバイタリティーは、そのまんま食いモノだな》

「でも、出会ってイエティ捕まえるって聞いた時はどうしようって思ったけど、凄く明るくなって良かったよ」

《まあ…な》

歩み寄ると、待ち構えるマナの前でラヴィはカバンを開けてなにやらゴソゴソと物色する。

《珍しく、オレ様の姿が見えるムスメだし、ちっとくらいならまあいいか》

ブツブツ独り言を言うジンに、すっと両手が伸びた。

《げっ！！》

「つかまえたあゝっ」

クリクリのブラウンの瞳が、ジンの目前でキラキラと輝く。

《離せオカッパっ！燃やすぞっコラっ》

「プニプニしてて斬新な触感っ…気持ちいいっ」

《人間の分際でおれ様に触るたあいい根性してんじゃねーかつ…燃やすっ、そのオカッパ頭モジャモジャに燃やしてくれるっ！！》

「はーいつ、そのふ・た・りっ——リンゴとトウモロコシ、どっちにします？？」

リンゴとトウモロコシ…とか言いつつ、何故かスコップを突き付けて、ラヴィが微笑みながら言った。

（（……こわっ））

「リ、リンゴがいいです」

「リンゴですね。じゃ、マナちゃんと待ってて下さい」

小さな袋の口を開くと、パラパラと黒い粒を手の平に数粒出した。

「……えっと、ラヴィ…その、間違いじゃなかったら、それって種よね？リンゴの」

「そうです。あ、こっちはトウモロコシでしょ、カボチャとトマトもありますよ」

他にも野菜やら果物の種らしき袋を見せ、ラヴィはちょっと自分の種コレクションを自慢げに笑顔を振り撒いた。

「や、そーじゃなくて……ラヴィっ食べ物よっ、種じゃお腹膨れないのよーっ」

「やだなあ、当たり前じゃないですか。コレをこれから実にするんですから」

「——へ？」

あんぐりと口を開けるマナの横で、ラヴィは手にしたスコップで硬い土を掘り出した。

「じょーだん…でしょ」

《馬鹿ラヴィ、普通人間は時間掛けて実らすモンなんだ。コイツの阿呆面見てみる》

「……あ、そっか。そーでした…マナ、すみませんでした」

「はあ……？」

「精霊使いはね、精霊の力と錬金術の応用で野菜や果実をすぐに実

「らせられるんですよ」

五センチくらい土を掘ったところで、ラヴィはリンゴの種をそこへ撒き、また土を被せる。

「——リンゴの木は大きいので、少し離れてて下さいね」

種を撒いた土の上に手を添えると、ラヴィは目を閉じた。

《見てな、オカッパ》

彼の周りを囲む様に集まりだしたのは、土と水の精霊。支配もされないレベルの精霊達が集まって芽を出し、木になって葉と花を咲かせ、果実を実らせる。

「だからオカッパじゃ……ない……って————」
「凄い……あつと言つ間に木が……」

本当に、あつと言つ間に芽から木が生い茂り、白い花を咲かせ、果実は凄いスピードで赤く熟れていく。

「……そろそろ食べ頃かな……マナ、幾つ食べますか？」

何だかともなく物凄いい事やっていると、全然そんな風に思っていない彼が羨ましくもあり、妬ましくもある。

マナは立派にそびえるリンゴの木に近付くと、ボカツとラヴィの頭を一発殴った。

「いてっ……マナっ？えっ……なにっ？」

何で殴られたのか知る由も無い彼は、リンゴをぎ取るマナを呆然として見ながら、頭の中に疑問符を浮かべる。

——何だかとっても悔しいケド。

「ラヴィ美味しいわ、リンゴ」

n
e
x
t

君に降る雪

ガタゴトガタゴト……。

揺れる景色は雪に覆われる山々と、数十メートル下方に流れる川。

（退屈）

かれこれ二時間はこの代わり映えのない風景。それも日が落ちてきて宵闇になり、おまけにお尻の痛さが手伝って、不機嫌仏頂面で隣に視線を移し変えた。

「ナンで寝れるのかしら」

こんな悪条件で、しかも幸せそうな顔で寝ていられるなんて、よっぽど図太いか鈍過ぎるかのどちらかだ。

乗り合い馬車がようやく通り掛り、乗れたのまでは良かったが、延々でこぼこ道でお尻は痛いし、居合わせた数人の乗客も年老いた者たちばかりだった。

（こーゆー時って、旅の話とかするんじゃないの、普通）

熟睡しているラヴィの鼻をぎゅっと摘まんでみるが、微動だにしない。

乗り始めてすぐ、彼はウトウトしだしたと思ったら、指折り数える間も無く眠ってしまった。

お気に入りのジーンは、ここで話していると他の客にお前が変人扱いされると、何か旨い事言われて消えてしまったし。

「べつに、いいのに…変人でもさ」

と言つか、皆耳が遠そうだし。上目遣いで周りを見ていたら、そのうちの一人と目が合った。

「……お嬢ちゃん」

「は、はいつ？」

話し掛けられ、ちよつと失礼な事を考えていたものだから、マナは驚いて姿勢など正してみる。

「リノスの村までは後どれくらいかのお？」

「あたしも詳しくないんですけど、日も落ちてきたし、もうじき着くんじゃないでしょうか」

今日はリノスという小さな村で一泊し、明日の早朝からまた馬車に乗って行ける所まで進む。

結構無計画な旅はある。マナの計算だと、三日後には自分の村があるククルに到着する予定だった。

「新婚さんかい？」

「え…はいいつ??？」

「ええのう、若いモンは楽しそうじゃ」

と、勝手に決め付ける老人がウオホホホ…と笑うと、何故か今までダンマリだった他の老人たちも、同じ様に笑って頷く。

（なっ…なにっ？ナンなのっ？？てか、新婚てナニよーつつっ！？）

顔を真っ赤にしてラヴィの方を見る。何処をどう見れば自分と彼が新婚夫婦に見えると言うのだ？

（楽しそうって…寝てるしっ、全然話なんかしてないしっ、ココのじーちゃんばーちゃんは目も悪いんだっ）

そうとは思えない。

とても恥ずかしくて、俯き加減に、なのに何故か笑みが漏れる。

「……笑ったのう」

「ほんと、やっとなね娘さん」

薄暗い幌の中で、笑みを返す老人たちにマナはハツとした。

（あたし……ああ、そうか）

ずっとヒドイ顔をしていたんだろう。眉間にシワを寄せて、つまらなさそうに景色ばかり見て。

思えば、村を出てからというもの、余裕がなくてついつい他人にあたってしまったり。

本当は優しい人たちばかりだったのに、自分からそれを閉ざしてしまっていたことにマナは気付く。

「あの…っ、あたしマナって言います。横で寝てるのはラヴィで、えっと…今、旅の途中です」

「新婚旅行かいのお？」

ガクッ。

「ちっ違いますっ、新婚違うしっ、あたしたちまだ子供ですう…っ
！！」

笑わせる為に新婚とか言ったんじゃないのか。本気だったとは、
やっぱり目はいいい方では無い様だ。

「照れんでええんよ」

何かもう、否定するのが面倒になってきたので、首を傾げつつも笑
って訊ねてみる。

「おじいさんやおばあさんは幾つで結婚したんですか？」

「わしは十六じゃった」

「わたしは十五で今の連れ合いとね」

「わしなんか十八で子供が三人もおったよ」

口々に若かりし頃の話弾ませるご老人たちを見て、マナは腑に落
ちたようだった。

（な、なるほど。）

随分暗くなってきたので、一人がランプに灯りを灯した時、馬車の
揺れが一層酷くなり、ガタンツと音を立てて止まった。

「大丈夫ですかっ」

「わしらは何とか…嬢ちゃんの連れは？」

「ラヴィ？——つて、寝てる場合かあっつ！！」

ボカツと一発お見舞いしてやる。

「……………え…あ、イモ…このイモは洗って……………あれ？」

「呑気に寝惚けてないでよっ、馬車が止まっちゃったんだからっ」

「いっごめんっ…急に止まったの？僕見てきます」

皆が覗き込む中、ばつ悪くすごすごとラヴィが外に出て行った。

「——どう？」

マナがひょこつと顔を出すと、車輪の前で御者とラヴィが話している。

「車輪が泥濘に入ったんだ——マナ、ちょっといいですか」

「なに？」

何やら耳打ちするラヴィに、マナはこくこく頷く。

「分かった」

「じゃ、お願いします」

マナは老人たちにすぐ動く様になるからここに居てと話して、馬車

を降りると御者に話し掛けた。

（ホントに…ラヴィって凄いいんだか、凄くないんだか……）

一体幾つ支配しているのか、精霊を使って馬車を動かすらしい。

御者に、馬車から目を反らさせること数秒。ほんの僅かでラヴィがマナを呼んだ。

「マナ、ありがと。もういいですよ——御者さん、車輪動いたのもう大丈夫です」

御者は何故だか…物言いたげだったが、日も暮れて急いで村に行きたかったので、黙って手綱を手にした。

「あの…マナ、ごめんね寝ちゃって」

再び馬車に乗り込むと、ちょこんと隣に腰掛けるラヴィがぼそぼそと話した。

「あつあたしの方こそ…その、鼻摘まんだり、殴ったりして…ごめん」

二人顔を見合わせて首を振る。気恥ずかしくなって、マナは頬を染めて視線を泳がせる。

「……やっぱり、新婚さんじゃったのお」

おじいさんの言葉に、マナはいよいよ真っ赤になった。

「シンコン？マナ、シンコンて何ですか？」

「なっ何でもないっっ」

《オカッパ——コイツはこの手の話、まるでダメだゾ》

何処から湧いたのか、ジーンがぼそつと囁いた。

n
e
x
t

君に降る雪

「——厄災を招く。よすべきだと告げている」

ロウソクの炎がゆらり、生き物の様に形を変えた。

リノスの村に着いてすぐ、マナは占い師に声を掛けられ、無料だと言うので見てもらうことにした。

「あの…でもっ」

占ってもらう内容は勿論、今自分がやろうと思っていること。

けれど、良くない事を言われ、正直無料に釣られて占って貰ったことを後悔する。

「客人、そもそも自然界を操作することは天地への冒瀆、その精霊使いは空言を言ってるんじゃないと思えません」

「そんな…っ、虚言なんてことは……だって、彼は確かに精霊を支配してるし」

めらめらと燃える炎は、まるで感情に左右されているかの様に、勢いを増す。

濃紺のローブにスカーフで頭と顔を覆った中年の女性は、じっとマナを見据える。

「嘘を言っているとは……」

「では、——それをして、精霊使いはどのような利を？」

「利?... そんなものは... ナイ、けど...」

いつもの彼女らしからぬ、奥歯に物が挟まった様な生返事を返す。

「その者の言葉に、表情に騙されてはなりません。人となりを見極めるのです」

マナは黙って、膝の上に置いた両手を見詰める。

「——さあ、良いまじないをかけて差し上げましょう... 目を閉じなさい」

「え」

「お帰りなさい、早かったんですね」

「なっ... なに... やってんの?」

上半身裸で迎えたラヴィにマナは焦るが、全く気にせずの彼は変らぬ表情のまま答えた。

「お湯が沸いたんで、身体拭こうと思って」

「そんなのは違う部屋でやってよ... って、一部屋しかないのか」

しかも、ベッドも一つしか無いことに、今更気付いた。

「ごめんっ、今服着ますから」

こついう事に、まるで無頓着であったことを思い出して、慌ててラヴィはシャツを羽織った。

「……いいわよ、まだ拭いてないんですよ。あたし、あっち向いてるから」

「いえっ、今日はもう……」

「いいから拭きなさいよっ」

後ろ向きに、マナが言いやる。心なしか……いや、確実に不機嫌だと思ひ、とりあえずは言いなりに身体を拭き始めた。

「——お腹空いてたら、昼間のリンゴが鞆の中に入ってますよ」

「……いない」

「マナ」

「黙って早くやっちゃってよねっ」

「——どうして怒ってるの？」

すぐ後ろに、彼の気配を感じて、マナは俯いて首を振る。

「占いで、何か気になること言われたの？」

何故、彼はこんなに優しくしてくれるんだろう。

世界には、多くはないが呪術を使える者が存在する。

その中でも、精霊を支配出来る者は希少だと、何の術を持たない凡人であっても、それくらいは周知の事実だった。

「それとも…また僕、マナに何か……」

その彼が、おいそれと利点も無しに術を振舞うのは何故か。

——それをして、精霊使いはどのような利を？

マナが振り返る。その目は何故か挑む様で、ラヴィは真っ直ぐにそれを受け止める。

「——本当はね、冗談じゃないって、啖呵切ってやろうと思ったわよ」

「マナ」

「だってそうでしょ！？あたしのこと…ラヴィのこと何も知らないくせにつ、有る事無い事さもお見通しみたいに言っただものっ」

すると、今度は泣き出しそうな顔になるが、口調は激しいままだった。

「ラヴィを疑うより、まずはあたしが話をしなくちゃ駄目なのっ、でなきゃ訊けない…あたしはまだ何にも言っていない…だから、」

「マナ」

すつと伸ばした両手が、マナの肩に触れる。

「僕の――何を話せばいい？」

下唇を噛んで、彼女は視線を彼から外した。

「マナが訊きたいこと、何でも言って」

「……っ」

「え？ち……ちよつとマナ……っ？」

強引にマナはラヴィを押し遣り、その先のベッドに押し倒す。抵抗してないとはいえ、何故にこの展開？にしても、華奢なのに相変わらず彼女は力強い。

「だから言ってんじゃないっ、話すのはあたしだって」

「……はい」

「あたしはマナ・キャンベル。ククル村出身で両親は居ない。育ての親はナギ・キャンベルで、彼は山を護る白の呪術師なの」

「……うん」

「夢はナギを手伝って優秀な山護りになることっ、修行だって毎日欠かさずやってきたわ」

「……うん」

「山に入る為の最後の修行として、十年間一度も雪の降らない山に雪を降らせるって言われたの……だからあたし、自分なりに考えてイエティを…捕まえて、それで……」

「マナ」

「貴方に逢った。貴方は精霊使いで……見た目貧弱だけど…凄い使い手で、しかもこんなに綺麗な顔してて…優しくて、ちょっとズレてるけど、だけど分かるわっ、貴方は嘘吐きじゃない…ラヴィは…ラヴィはいい人なんだからっ」

言い切ったのと同時に、マナの首筋から、細切れになった紙の様な物がパラパラと落ちてきた。

「——成程。」

その欠片の幾つかを掴み取って、ラヴィは双眸を顰める。

「ありがと、マナ……僕も、マナは素敵な女の子だって思ってますよ」

「ラヴィ…それ?…あたし」

「月の所為にしたくないけど、どうしても注意散漫になっちゃうな…気付けなかった」

「あああたっ…あたしっ何っ?何やってんのっ!?!…ちよっとっ、ナニ押し倒されてんのよっラヴィっ」

「いやあゝ、それは……少し、首みせてマナ」

(ふ……ふぎゃっ!!)

「動かないで、そのまま」

肘を付き、半身を起す彼が、マナのうなじを搔き上げる。

(息が… かかってんですけど…… ラヴィ…っ)

顔から火が出るって、このことなんだと思った。恥ずかしくて、ドキドキして、なのにやめて欲しくないとか…頭の中がぐるぐると回る感じがする。

「——マナ、あのね」

(耳元で囁くなーあっっ) 「……な、なに？」

「ごめん、ちょっと痛くする」

「え」

首筋に彼の指先が触れた途端、ばちんっ、と何かがスパークした。

「いいっ…痛っ」

「ごめんね——でも、これで払えたから」

「何を……って、ラヴィっ指から血出てるよっ」

「うん、血が要るから噛んだ」

「噛ん——だって…よく見せてっ痛いでしょ?」

「へーき。舐めときゃ治るよ」

ぱくっ。

その人差し指を、マナが口に含んだ。

彼の笑顔が面映くて、ついやってしまったが、自分にしては大胆なことを…と、ちらっとラヴィの方を見たら、照れるでもなく違う意味で慌てている。

「マナ…ああっ不味いですっ、僕の血…は」

「……………うゝえ…確かに血ってマズイわ」

ジインの言う通り、やっぱり鈍いんだと、若干落胆する。

「マナだいじょぶ? なんともない?」

「…うん」

「ほんとに?…なら、いいんだけど」

口にしても、大丈夫なのか。と、ひとりごちして吐息する。

「ラヴィ…それで、その……とりあえず、服着る?」

側のシャツを引っ張って差し出すと、袖を通してながらラヴィは事のあらましを話し出す。

「——マナに仕掛けた呪術は警告だね。どうやら、僕が邪魔なみたい」

「さっきの占い師っ？あたしが捕まえて…」

「いえ。もう、居ないと思う…それに、首謀者は人間じゃない」

おぎなりに二つくらいボタンを留めて、ラヴィはマナの頭を褒める様に撫でた。

「ラヴィ…?」

「凄いよね。いくら警告って言っても、多分『首絞めろ』くらいの内容だったと思うよ。だけどマナは何もしなかった——意思が勝つんだ、それって凄いことだよ」

「……ホントに?」

「うんっ」

ふつつつと沸き起こる感情が、諸々の理性と闘い合う。

「何か……あたしって意外と単純なヤツなんだって認識」

何くれと、——嵐の予感。

n e x t

君に降る雪

「じゃ、食べ物は何が好き？」

「何でも食べますよ」

「ふうーん、好きな色は？」

「うーん…白、かな」

「あ、これ訊くの忘れてた。誕生日はいつ？」

「五月の…えつと……」

《ちょーっと待てっ！マナ、お前さっきから十二質問攻めにしてんだ》

「ジイには関係ないでしょっ」

「十七日だった……あれ？」

隣に並んで歩いていたはずのマナが、三メートル程後ろで、ジーンと揉めていた。

「なんでも訊いていいって、ラヴィが言ったんだよっ、ジイってカイルのお母さんみたいっ」

《ダレっ？知らん例えじゃ効果ねえっっーの》

「お隣に住んでるチビのお母さんよっ、あれこれといつも五月蠅いの。過保護ってやつよ、これで分かったでしょっ？」

《分かるかつボケッ》

「二人とも言い合いは…」

やれやれまたか、とラヴィが間に割り込んだら、両方から睨みが飛んできた。

「もとはと言えばっ、」

《馬鹿ラヴィが悪い》

そんな理不尽なと思うが、自分だけは冷静でいなければと、宥めにはいる。

「ジイってラヴィに支配されてんでしょ？その割りには主従関係おかしくない？」

《うっさいっ、それこそオカッパにはカンケーねえっ！》

「もっとビシッと言っべきよっ」

《ナンダトーっ！減らず口っ》

「まっ待ってよ…っ、二人とも僕の話聞いて——あのねっ、僕はジインもマナも大好きですよっ？」

「……なっ、なによそれ」

《ナニ阿呆なこと……》

「あれ、違った？」

と、言いつつも、ラヴィはしてやったり顔でほくそ笑む。

「大好きですよ、本当に」

極めつけ、実に爽やかな笑顔を振り撒いて、敢え無く消沈。
鈍いこの男も、この数日で流石に学んだらしい。

「このまま行けば、明日の夕方にはマナの村に着ける様だし、三人で仲良くしましょ…ね？」

「やつやーねっ、別に仲が悪いって訳じゃ」

《まあ、な》

「ジイのこと好きよ？プニプニしててファニーな見て呉れも可愛いし」

《はあああつつ？？》

「ねーっ、触らせてっ」

《阿呆かつ、近付くなっオカッパっ》

「いいじゃない、じっとしてよ…あ、こらっ止まれジイ…ジインっ
てばっ、止まってっ」

《ダレがつ——え…アレ?》

空中で固まったジインを、ラヴィが凝視し、マナは喜んで両手を広げる。

「ジイ捕まえたっ……って、どしたの?ラヴィも、目がまん丸だよ」

「マナ…今の、ジイン?」

《意向無視された。間違いねえ…って抱きつくなコラッ》

紛う方ない、支配者の命によるもの。

《行使類じゃないぞ、どーなってるんだ?お前に言われたのと同じだった》

「ねえ、急に何の話?」

ジインを抱えて、むぎゅっとしながらマナが訊ねるが、ラヴィは指を口許に思案する。

《コイツさ、オレ様のこと見えるし触れるし、もしかすつと》

「ああっつ」

「な、何っラヴィ?」

「僕の血飲んじやったから…かも」

ぽんっ、と手を打ち合わせて、ラヴィは納得した様に頷く。

《血？ナンでコイツがお前の血なんか飲むんだよ》

「飲んだよ。とゆうーか、舐めた程度だけど」

《はあっ？》

「マナ、もう一度さっきみたいにジインに…そだな、逆さまになれーって言ってみて」

《逆さま？おいおい…馬鹿ラヴィっ》

「それって…もしかしてあたしの言うことジイが聞いてくれるの？」

《オレ様をオモチャにするなーっ》

ニンマリ笑って、マナがコホンッと咳払いする。

「ジインっ、逆さまになれーっ」

しーん。

「ジインっ、さかさまーっ」

しいーん。

《ぶっ。マグレかよ》

「うーん…まぐれと言うより効力切れ？かな。どっちにしても、マナには精霊使いの資質があると思うんだけど」

「うそ…ラヴィ、それホント？」

「うん、ジインはね僕が支配してるから、他の人からの命令は本来聞かないんだ。だからさっきのはマナが僕の血を——マナ？」

ラヴィの両手を掴んで、マナは目をキラキラと輝かせる。

「そーじゃなくて、資質がどーのって」

「可視、聴視、接触まで可能な訳だから、マナは鍛錬次第でなれると思うよ、精霊使いに」

「ホントにホントねっ？」

「はい…精霊が操れたら、マナの目指す山護りの仕事にきつと役立ちますね」

「ラヴィ…っ！」

「わあっ」

また…ですかあ。

飛び付かれて、後ろ倒しになるところを、ラヴィは何とか踏ん張って尻餅にとどめた。

「どーしよっ！？あたし超嬉しいんだけどっ」

「僕はお尻が凄く痛いです…っ」

《まあ、精々修行でもすんだな。オカツパなら十四、五年程でなれんじゃね?》

「十四年で…そんなにかかるの?」

「個人差はあるけど、早い人でもそれくらいは」

「えーっ、ラヴィはもう使えてるじゃない」

《阿呆っ。コイツは…言っただろ、ヘンテコリンだってな》

「それ…めっちゃめっちゃ語弊あるんだけど」

「まあいいわ。村に戻ったら猛勉強して、絶対に修得してみせるんだからっ」

「凄いな、マナはいつも前向きで。僕尊敬しちゃいます」

「ほ…褒めても、なあーんも出ないからねっ」

緩んだまま戻らない頬を赤らめて、マナはラヴィに手を差し出した。

「よいしょっ…と、じゃっククルまであと少し、張り切って行くよーっ」

《ナンツーか、ホント単純なムスメだよな》

「ヘンテコリンに比べたら全然いいじゃないか」

《……拗ねてるし》

n
e
x
t

君に降る雪

焼べた薪に擦れて、パチパチと音をたてて燃える暖炉の前で、マナは養父や村の話を頻りに話す。

彼女の住むククル村は、あと半日も歩けば着くところまで来ていた。

「この小屋にもね、ナギと何度か来たことがあるの」

外はまた雪が降り出していた。辺りに見えるのは木々と白い雪が覆う、山間の僻地には珍しくもない光景。

「ククルもね、村を一步出たらこんな感じの所。なあーんにも無いけど、あたしはあそこが好き」

毛布に包まって、マナは手にしていたお茶の残りを一息に飲み干した。

「山に囲まれてるから、雨はよく降るし、冬は雪も多くて災害が起きやすいんだけど、でもナギがそれを最小限に食い止めるの。それが仕事だって言ってるけど、あたしはナギを誇りに思うわ」

「呪術は万人のために有れ。その為に用いることこそが、貫き通す信念にまた然り……僕の師の一番の教えです。本当に難しいのは、手にした術に自らが溺れてしまわないことだと——ナギはそれを躬行出来る、賢慮な方なんですわ」

「ううーん？なんか難しくてよく分かんないけど、ナギのこと凄いて言ってくれてんのよね、ありがとラヴィ」

「僕もナギにお会い出来るのが楽しみです」

「そうね、話合っくんじゃないかしら。ラヴィってこーやって話していると、結構おじさんぽいところあるし」

「おじ…えーっそうですかっ?」

《否めんな。否定する方がおかしい》

「う…ヒドイや」

「でもそんなのは外見でチャラよっ、だってすっごい美形だものっ…ジエシカもアンも目をハートにして飛び付いてくるんじゃないかしら」

飛び付くを想像して、ラヴィはげんなりする。まだ居るのが、マナのような弾丸娘が。

「褒めてるのに、ラヴィは嬉しくないのね。自分の顔が嫌いなのか」

「嫌いって言うか、よく分からないんだ。つい最近まで、僕は自分が他人からどんな風に見られてるのかなんて、考える必要のない場所ですらしてたから」

「何それ?どんな所よ」

「森の奥の、……マナ、ごめん僕ちよっ」と

話の途中で、ラヴィがドアを差して立ち上がる、ジーンも長い耳をぴんつと敬てた。

「あ…ああ、うん。茂みは暗いから気を付けてね」

《ラヴィ》

「ジインはここに居て、いいね？」

《わかった》

「そーよお、一人じゃないと用は足しにくいでしょ、ジイ」

《…だな。》

しん、と一面を雪が音を吸い取った様に静かだった。
雪明りを頼りに、ラヴィは茂みの中へ進む。寂寞としたその奥に、
それは居た。

「……僕を呼んだのはキミ？」

肩高一メートルはある灰褐色のオオカミ。ラヴィの声に、金色の目
が閃光した。

《如何にも》

「それで？」

《ナニが目的か？》

「知ってるんじゃないの？雪を降らせに行くんだよ」

《笑止だ。ナニを謀る？精霊使い》

「画策してるのはそっちでしょ。そもそも、雪が降らないのだからキミの主の所為なんじゃないの？」

《人間風情が黴られたいかっ》

「それ、主の命に悖るんじゃないか？主旨から逸脱してる」

《かしがましいっ…人間如きが舐めた口をきくなっ！》

「——もう少し訊きたかったけど、キミじゃ無理か」

前足で雪を蹴上げてオオカミが飛び掛かる。

感情的、見境なく喰らいつく様は、負け犬の遠吠え宛らだと、ラヴィは冷淡に一瞥をくれる。

「舐めてんのは、」

大きな口を開け、牙を剥き出して噛み付こうとするが、オオカミはラヴィの目前、僅か数センチの所で硬い壁に遮られた様に、見えな
い何かに叩き付けられて、ギャンツと鳴き声を上げた。

「そっちでしょ」

《結界っ！？何時の間に…》

「最初からだよ。こんなモノも見極められない三下よこすなんて、

よっぽどキミの主は舌が長いんだね」

《おのれ…っ》

「悪者は皆それ言っね」

《いいだろう精霊使いつ、我が主を蔑ろにした罪…お前のその身で知るがいい》

「何がいいのか知らないけど、その主に言っておいて。——マナはお前なんかにあげないからって」

「ただい——」

ドアを開けるなり、ジインが真正面、ラヴィの顔にぶつかる寸前にまで近付く。

《しーっ！…小声で話せ》

「……寝ちゃったの？マナ」

《そゆこと。……あ、ケモノの臭いがする》

ラヴィの周りをクンクン嗅ぎながら浮遊する。

「使い魔のオオカミと話してきた」

《ボスは？》

「分かんない。単細胞で話どころじゃなかった」

《御里が知れるな》

「だねえ… マナは何も知らないんだろーし」

暖炉の前で寝そべるマナの側に寄ると、ラヴィは彼女の頬にかかる髪を梳いた。

「多分養父だつて言つてたナギは知ってるね、だからマナを遠ざけたんだと思う。無理難題押し付けてさ」

《オカッパの性格だつたら、手段見付けるまで帰つて来そうにねえもんな》

「とにかく、相手にはこっちの行動バレちゃってる訳だし… 行くしかないね、ククル村に」

《なあゝんかつ、久々に暴れられるカンジ？》

「よりけり、だけどね」

《お前つて、人間以外には気合入れるよな… ニヒルっつーか、ガキの頃思い出す》

「本質は変えられないってことじゃない？ 僕ってこんな奴だよ、善人振るのが上手くなっただけ」

《——阿呆》

頭に乗ったジインが、ばちんと尻尾もどきでラヴィのおでこを叩いた。

《馬鹿ラヴィ、お前は本質の意味を知ってて使ってるか？》

「ジイン…？」

《お前はなあーんも分かってねえよ、でなきゃオレ様はお前を選んだりしねえ》

「どついう意味？」

《それは…ったくつ大事なところが抜け作っ、オレ様のピュアな心がそー言ってたんだっ、つまりそーゆーことだっ！憶えとけ馬鹿っ》

「ぜ、全然分かんないんだけど…ピュアって誰っ？」

《やかましい…っ、寝ろっもう寝ろっ！》

「——ぷっ」

《笑うな——っ！！》

n e x t

君に降る雪

「あと…ちょっと、ここ登ったら下に村が見えるよっ」

「そう…ですか…はい、じゃもう一踏ん張り…ですね」

ひ弱に見えて、それでも体力には自身があつたが、流石に延々上りと言つのは堪える。

彼女が何故あんなに力も体力もあるのか、成程ここで生活をする為には、あれくらいのパワーが必要水準なのだと、ラヴィは身をもつて知った。

「よいしょっと…一週間振りの——」

先に行くマナは、上りきつたそこに見えるであろう村を、見下ろしていた。

《オカッパに余裕マケじゃん》

「…言葉ないです」

どうにか待たせない程度で追い付いたラヴィが、横に立つマナの表情に異変を感じた。

「マナ？」

「ククルが……」

「——マナっ!？」

慣れた坂を彼女はカモシカのような足取りで下って行く。完全に出遅れるが、マナの走るその先に見えた風景に、ラヴィは驚愕した。

《オカツパの村…雪が降ってない？——ラヴィっ》

「ジインは先に行ってマナを」

《了解っ》

所々雪を掻き分けて、マナは逸る気持ちを抑えきれないまま、目前に見える村への入り口付近に見知った顔を見付けるや否や声を上げる。

「ジェシカっ、アンっ…！」

呼び掛けに、二人の少女もマナの方へと向かった。

「マナっ、ああ…でもよかった、帰ってきたんだ」

息を付く間もなく、マナは合流した二人に話し掛ける。

「二人ともっ、何があつたのっ！？なんで村に雪が降ってないのっ？」

「雪は…マナが出た後すぐにやんで、それからはずっと降ってきてないわ」

「なんでよっ？だって周りは…あの山以外は降ってるじゃない」

「うん…そうなんだけどね、それよりマナ」

「それよりって、変だよこんなのっ！ナギ…ナギはっ！？」

マナの言葉に二人は顔を見合わせて困惑するが、内一人の、ジェシカと呼ばれる少女が口を開いた。

「マナあのね、ナギは……」

後を追うラヴィは、マナを見付けて駆け寄ると、その肩が震えているのに気付いて、声を掛けられずにいた。

「……う、そ…嘘よっ…！」

怒号にも似た彼女の声に息を詰めるラヴィの真横に、ジンが寄り小声で話す。

《ナギが、死んだらしい》

「嘘じゃ…ないよ、昨日の朝見付けた時にはナギはもう——今は教会に運んで」

「——ナギ…っ…！」

「あ、マナ…っ」

彼女等を振り切って、再びマナが走り出す。ジンは透かさずその後を追った。

「すみません、僕マナと旅の途中で知り合った者なんですが、少し

お訊きしたいことが」

「あ…はい」

「引き止めちゃってごめんね、僕ラヴィって言います。——お亡くなりになったナギさんの死因はご存知でしょうか？」

旅人が立ち寄るのも疎らなこの村に、同じ年頃の男の子がやってくることなど、年に一度あるか無いかの事で、彼女たちはまごつきながらもラヴィの質問に答える。

「し、心臓麻痺じゃないか…って、薬師のカミューさんが」

「傷も無いし、何処か患ってたって話も聞いたことないし…ね？」

「うん…」

「そうですか…村に雪が降らない原因は何か…ナギさん仰ってましたか？」

「ううん、一度多分それでは行ってたみたいだけど、何も」

「でも亡くなる前の日に、もう一度山へ行くって話してたのは聞いたけど…」

話に、暫し黙り込むラヴィを、二人は上目遣いでじっと見詰める。年に一度どころか、こんな都会っぽい風貌の男の子を見たのは初めてだった。自分たちより肌が白く、翠色の瞳も見た事がなかった。

「ありがとうございます。僕マナを追いたいんですが、教会は何

処か教えて貰っても……あの？」

「は、はいっ教会…教会は村に入ればすぐ右手に見えてくるので…」

「そうですか、じゃ僕行きます」

ぺこつと頭を下げて、ラヴィは村へと走って向かう。

その後姿を少々残念に思いながらも二人は見送る事にした。

n e x t

君に降る雪

彼女達の言った通り、教会は村を入るとすぐに見えた。

普段は開放されている筈の扉が固く閉ざされているのは、死者が礼拝堂に眠っていることを示唆する。

重い扉を、ラヴィはギィイという音と共に開くと、それほど大きくない堂内のその奥に、マナがぼつんと立っていた。

（マナ……）

掛ける言葉がみつからない。

マナはじつと一点を見詰め、微動だにせず、ただそこに立つ。死者に触れようもしない、涙も、ない。

術も無く、見守ることしか出来ないラヴィもまた扉の前で立ち尽くしている、彼女の後ろ手のドアが開き、出て来た中年の男性がマナに気付いて声を掛けた。

「マナ、帰っていたのか……そうか」

男性はマナの側に寄り、あやす様にその肩を何度か叩いた。

「今な、神父様と葬儀の話をしてたんだ——今夜、執り行われる。ナギは村の為に尽瘁を惜しまない人だったから、皆で野辺送りしようってことになった」

顔色を変えず、無表情のまま、聞いているのかどうかも分からない。ただそこに居る彼女は、まるで別人の様に生気が感じられなかった。

「マナ、帰ったばかりでお前も疲れただろう。少し休んで…ちゃんとナギを送り出してやろう、な」

そのまま、男性はマナの手を引いて歩き出す。導かれるままに、彼女は抗うことなく歩みを合わせた。

「……マナ」

ラヴィの呼び掛けにも、マナは答えない。代わりに男性の方が口を開いた。

「彼女のお知り合いですか？」

「はい、旅の途中で……」

「そうですか。今はこの通りで、なんの持て成しも出来ませんが、宜しければ一緒に」

「ありがとうございます。ですが…少し用がありますので」

「なら、用が終わったら辺りの人にオルガの家はと、訊ねて頂ければ分かりますので」

「はい…あの、マナを」

「大丈夫ですよ、私の妻も娘も側に付いてるだろうし。…それでは軽く一礼して、男性はマナを気遣う様に支えながら表へと出る。

《で、どうすんだ？お前は》

「少し、調べたい事が…ジインはそのままマナに付いてて」

《山に行つてサクツと片付けた方が早いんじゃない？》

「ナギが死んだ理由を知りたいんだ……何かあつたら、遠隔は苦手だけど僕とジインなら為せば成るよね」

《……しゃーねえなつ、付いててやるよつ。じゃーなつ》

頷くと、ラヴィは礼拝堂の奥へと進む。死者の…ナギの骸へと近付いた。

亡くなったのが昨日の夜から朝にかけてと言うわりに、ナギはまだ、まるで眠つた様にも見えるくらい状態のいい死体だった。

（やっぱり…）

腐敗の度合い、気温の低さの所為だけではない。

「まだ亡骸じゃない」

魂の残留は、人が生を終えるその時の在り方が普通で無い事を黙示する一つ。

命を失つてしまうには、若く屈強なさまに見える肉体。心身ともに鍛え上げ、村の為に尽くしてきたのだと、マナが自慢げに話していたのを思い出す。

「ナギ…すみません」

棺に横たわる彼に黙祷し、ラヴィはその身体に触れた。

「——その方、何をされているのですか？」

不意に、後ろから声を発せられて、ラヴィは驚きながら振り返った。

「見ないお顔ですが…どちら様でしょう？」

「ごっ、ごめんなさいっ…あの、神父様…ですよね？」

「はい——ですが、今訊ねているのは私の方です」

「すみませんっ、ラヴィ・クラフトって言いますっ——そのっ、神父様…何て言えがいいか…ナギの身体を、その…少し調べさせてもらえませんか？」

ラヴィの言葉に、神父は嫌な顔こそしないが、つかつかと歩み寄ると、そっと腕を取る。

「——いけません。それは死者への冒瀆です」

厳しい物腰で、神父はラヴィを叱責する。

「です…よね、それはもちろん…なんですけど……」

「今ならまだ神は咎めないでしょう、共に謝りましょう」

「それはちゃんと…後で……」

「後、とは？」

これ以上は普通に話しても恐らく無理だろう。

ラヴィは、一度神父に向き直って礼儀をはらう様に、両の目にきっちり収める様にして彼を見据えた。

「神父様は公的に任命された神職者ですよね」

「え、ええ…そう、ですが？」

「では、元老院に続く神祇官に身を置く方と判断して宜しいですか？」

「勿論です、末端とはいえ国家の神官職であることに変わりはありませんがそれが…？」

「だったら——すみません、拡大鏡ありますか？」

何を唐突に。流石に今度は怪訝気味にラヴィを見ると、彼は耳に付けているピアスを外して、それを神父に差し出した。

「——聖光碧石です、確認して下さい」

「まさか……」

戸惑いながらも、ピアスを受け取った神父は、懐中より小振りのルーペを取り出してそれを見究める。

「アモネアジル……紺碧の椅子の資格者…貴方が」

小さな碧い石の中に刻まれた文字は、見る者が見ればそれと分かる、紛う事なき元老の一人である証が記されていた。

「犬の首輪と同じですが、時には役立つ。なので、すみませんが調べさせて下さいね」

絶句したのか、何も言わず神父はただその小さな石をラヴィに返して、頷くには頷く。

受け取ったピアスを付け直す彼を見て、信任した神父が呟いた。

「確かに、それは認めた者にしか身に付けられぬ妙品……しかし、何故このような僻陬の地へ参られたのですか？」

「彼女と…マナと約束したんです。山に雪を降らせるって」

n e x t

君に降る雪

「彼女と…マナと約束したんです。山に雪を降らせるって」

再び、ナギに視線を落として、ラヴィは彼の衣服をはだけた。

「では…私は邪魔になるといけませんので奥におりますから」

返答は無い。素性を知って訊きたいことは山程に膨らんではいたが、その横顔の専心振りに神父はそのままそこから離れた。

（あつた、左の脇腹——稀だな。しかもこの刻印、なんか奇異な感じがする）

所見で知り得るには限界がある。分かるのは、人間界には存在しない文字で記されている事と、心覚えでの知識から、それが闇に属するモノの所業であること。

（不得要領、か）

ラヴィは伏し目がちに視線をナギの顔へ移す。ここに留まる魂の僅少は、不帰の己に何を馳せるのか。

棺を握る手に、一際力を込める寸時。それから、その手を宙へ擡げた。

「——リリイ・ルウ」

ひらり、手首を使って円を描くと、大気を割く様にしてその中から顕現するのは、一体の精霊。

属性に相応しい淡青の髪色を持ち、程度は猫くらいの、人間の童の姿形をしていた。

《主さま、ルウにございます》

従順な水の精霊は、ぺこつと首を垂れて、零れそうな笑みを見せた。

「ルウ、早速いいかな？」

《主さま、なんなりと》

「——天地に介する真水の精霊、その者…現前の支配者に下り混和せよ……………あれ？」

ルウ？と呼び掛けるラヴィに、水の精霊は頬を染めて恥らう。

「どうしたの？」

《なんなりと…そう申しました。主さまに…はいっ、ルウは…ルウは主さまに潜りますっ》

意気込むルウに、ラヴィは数回瞬きして思い立つ。

「そっか、ルウは女の子だもんね…じゃあ、こうしょ？」

両手に乗せると、ラヴィはルウの小さな唇に口付けることで接触する。支配される者としては恐悦至極な厚遇を、我が主は知ってか知らずか事も無げにやってしまう。

だからこそ、報いたいと思うのかも知れない。ルウは形状を変え、瞬く間に彼の体内に浸透した。

「そうだった、僕の中に入るのって初めてだったね」

全身を隈無く廻る血脈の流れに雑じり、体内の彼女を感じる。

「……ルウ、君のその力を借りるよ」

人知に及ばない、異界の音を聞き分ける有為に。

再応、ラヴィはナギの脇腹に刻まれた刻印に、軽微に指を滑らせた。

「冥夜に存命する者に質す、我の発問に応えよ——真価……某に
…仔細を——我が身躯に」

それからの一瞬、総毛立つ様な震えの中、無法に獲得を遂げてラヴィは深く息を付く。

「ルウ、大丈夫？」

彼の身体から離脱したルウは、答えるかわりに水風船の様なまあるい輪郭をくによりと曲げてみせる。

脳髓をうつ音吐が延々と続いていた。

噎れた声、濁声に蛮声、金切り声が鼓膜を越えて、とどめく。

ズルズルと棺を置く台座に背を滑らせて、ラヴィは座り込んだ。

「うえ…吐きそう」

鳴り止まない叫声に頭を抱える。

「主さま」

「相応を知れって…分かっててやってんだよ、こっちは」

誰に言う訳でもなく珍しく愚痴る彼に、元の愛くるしい姿に戻ったルウは、ハラハラしながらも俯いた表情を窺う。

「主…ラヴィさま」

「あ、ごめん…ルウに言ったんじゃないよ。無理させたね、平気だった？」

「はい、ルウは守護精霊なのに全部ラヴィさまが…」

「ルウ…ありがとね。大丈夫だよ、僕だって只じゃ転ばない」

頭を振って、重く感じる身体を起すと立ち上がった。

小言なんて失礼だと、ナギを見て恥じる。ラヴィは彼の衣服を直しながら、その双眼に悲哀を含ませた。

「——ナギ、貴方は……」

その命を捨てたのか、彼女の為に。

瞼を閉じ、呟く様にラヴィはそれを称える。

「ラクスターファ…」

母親の腹を食い破って誕生し、その心臓までも喰らい力を付けたと云われる、巨大なオオカミの姿をした魔物。

言い伝えでは、ドワーフの足枷で動けなくされたとされるそれが、ナギを死に至らしめた存在だった。

「ラクスターファが何故貴方に…その経緯までは分かりませんが、必ず冥府へ返します——だから、ナギ」

——どうか、安らかに。

n e x t

君に降る雪

夕刻、逢う魔が時に降り立つのは、死を司る使者。
ソレは夕闇に紛れて、蕭然を見計らう様にして遣って来る。

「——待ってたよ」

《へ？》

声が聞こえたのと同じ、踏み込んだ拍子に床板を突き抜けて、蒼光が魔法円を浮かび上がらせて真上に伸びた。

「結縛、そのふたつ…障纏」

《げっ…なんで結界！？》

周りをキョロキョロと伺う眼は深く窪んだ灰鼠色、その姿は矮小でゴブリンに類似している。

「訊きたいことがあって、已むなく」

《………ああああっ、オマエっ、オマエたしかっ》

口承される『黒いローブを纏い、大鎌を振るう白骨の者』のイメージが定着したのは、見た術師の誰もが、死を描く上での脅威を万人に寓意して欲しいとこれ等に頼まれたからとか。

《グリモワールだっ、グラデュース・リンネの息子ラヴィっ》

確かに胡乱としたこの者を『死神』と呼ぶのは、少々気が引けるのだが、外見とは不釣り合いなくらいに、犀利で狡猾なコレを嵌めるのは中々に難儀である。

《んー？違った、か》

「違うない」

《よな。この死屍の知り合いか？話したいのか？見送ってやるのか？》

「どれも少し違う、訊きたいのは君の方、話は出来ないよ見てごらん」

《んんん？…ナギ・キャンベル。死因は…ありや。ふうん、そっかそっか》

何処からともなく現われた分厚い書類の束。死神よりも大きいそれが勝手にページを捲り、抜き出た一枚を手に突き合わせる。

《魂えぐったのか。ここに興味？ラヴィ・クラフト》

口吻を漏らす死神を、ラヴィは無言で睨み付けるが、そのくらいは全く気にならない様子で棺の中へ入っていった。

《なおざりにしよって。これじゃ途中で消えちまうんじゃないか》

「——ラクスターファだよ」

《へえ。直視？》

「いや。さっき訊いた」

《よくやんなあ、あつちはグリモワールだったって管轄外っしょ》

「ラクスターファは捕らえられていたはずだね、どうしてこの世界に？」

《さあ》

「話してっ」

《若干身内売るカンジ？ラクスって地獄行きの首ちょん切るのが生業だったしい》

ギョロリと、灰の眼をラヴィに向けて、死神は嗤う。

《ラヴィ・クラフトさんの真の名が欲しいなあ、ワタクシ》

「謂れ無い」

《えー等価交換じゃない。じゃー、ドコか頂戴。血とか目とかその皮膚でもいい、予約オッケーですよ？》

「足許見たつもり？もっと聡いかと思ってたけど」

《結果ですか？頑丈に二枚張り。でもこれだけじゃ、話すに値しないでしょ》

まだまだ余裕の素振りを見せて、死神は棺から身を乗り出す。ラヴィはそれに、これ見よがしな溜息を付いた後、ニッコリと微笑んだ。

「取引は同等じゃないと成り立たないんだよ死神」

《もちろんですよ》

「君をここへ閉じ込めた時点で気付くべきだね、僕が君の何を持っているのかを」

《なん、だって?》

訊き返しながら、死神は想起した。

「支配されなくなったら、僕の質問に答えて——ガザドラ……」

《うわあああっつ!! 言うなああっ——!!!》

そうだった。ラヴィ・クラフトの微笑みは窮地の前兆。

「僕の勝ち?」

《認めますっ…はあ、グリモワール恐るべし》

n e x t

君に降る雪（後書き）

ネタのお話。

『ラクスターファ』は北欧神話の『フェンリル』を参考にしてます。
『死神』についての記述は完全にあかさかオリジナルで。

ラヴィの居る世界での、私が思う死神のイメージにしました。

口の悪さは……ご愛嬌（笑）

君に降る雪

日が落ちて、村は喪に服しひっそりとしていた。

里長のオルガの家では、娘のジェシカが心配そうにマナに付き添う。元気付けようと、彼女なりにアレコレと世話を焼くが、マナは空返事を返すか何も答えないか、もうすぐ葬儀が行われるというのに、どうすればいいのかと思案に暮れていた。

「ジェシカちよつと…」

母親に呼ばれ、彼女は自室のドアを開ける。

「あと一時間程で始まるから、マナに黒衣をね…ジェシカちよつとキャンベルさん家行つて取つて来てちょうだい」

「わかつたわ」

頷いて、マナの方を見ると、彼女は椅子から腰を上げて立っていた。

「おばさん、大丈夫です…あたし、自分で着替えてきますから」

「マナ座つてなよ、私取つてくるから…ね？」

「ジェシカありがと、本当に平気よ。一度家にも戻りたいし」

コートを手に、マナはドアの前に立つジェシカと彼女の母親へ薄らに笑みを浮かべる。

「マナ…なら、ジェシカと一緒に」

「おばさん、ありがとう…すぐそこだし、一人で平気です」

「——分かったわ、後で迎え寄こすから」

「はい」

見送られてマナはオルガの家を後に歩き出す。

彼女の後ろには、終始無言のままのジンが追う。

日がなお喋りな精霊だが、彼なりに気を使い、なるべく彼女の視界に入らない様努めて後方に付いていた。

「……ジイ」

数時間振りに、マナがジインを呼んだ。

《なんだ？》

「なんか、悪いね。ラヴィはどうしちゃったんだろ」

《心配すんな。アイツは貧乏性だからな、じっと出来ない性分なんだ》

「後で、また話せるかな…ラヴィに」

《当たり前だろ、ナンだ？話あるのか？》

「そうじゃないけど。だよ、ジイがここに居てくれるんだし、後でちゃんと…」

切り揃えられたハチミツ色の髪を僅かに揺らして、マナは俯き加減に歩みを自宅へと向ける。

後ろのジインには窺い知れない、彼女が今どんな表情でいるのか。

《……呼んで、やろうか？アイツ》

振り向かないまま、マナは首を振る。それが精一杯なのは、粗野なジインにも伝わるが、彼女が側にいて欲しいと願うのが、数日行動を共にしただけの彼だという事に危惧する。

マナにとっての、ナギ・キャンベルという存在がどれだけを占めていたのか。

他に、誰か彼女が心を許せるくらいに、ナギの死を偲べる者がこの村には居ないのか。

「着いたよ、ここ。入ってジイ」

彼女にとっては、ナギが全てだったのかも知れない。

《オカッパ…馬鹿ラヴィは泣き虫だって知ってるか？》

「知らない。それは…質問から…抜け、て」

玄関のドアを閉めるや否や、その場にすんとしゃがみ込む。

マナは薄暗い部屋の中、コートの裾をぎゅっと握って唇を噛み締めた。

ほんの少しここを離れただけなのに、部屋に残る我が家の匂いが懐

かくく、ここでの日常が遠くに感じられた。

「…………ナギ」

彼の名前を口にした途端、止め処もなく涙が溢れ出す。

「ジイ…あたし、ね…ナギのこと……ホントのお父さんみたいだつて…………ふ、ふえ…っ」

わんわんと、糸が切れた様に声を上げてマナが泣く。

《…………馬鹿娘、まだガキなんだから、ドコでだって泣きやいいんだよ》

仕様が無い。ジインはハンカチ変わりにくらいにはなつてやれるかと、懐に入り込んで抱きかかえられることを許した。

「ジイ…い」

ハンカチと言うよりクッションと化したジインは、黙ってマナに付き合つてやる。

一頻り、マナは思いつきり泣いて腫らした目を擦りながら、やがて両手に収まる彼にはにかんで、微かな笑みを見せる。

「ありがとう、ジイ」

《礼には及ばん。オレ様はただのクッションだ》

とか言いつつ、火の精霊が涙で濡れて燻るなんぞ格好悪いと、照れ

隠しに白々しく近くにあったテーブルクロスで身体を拭いたりしている。

「あたし、着替えなきゃ」

《そーだったな》

「ジイはここに居てね、恥ずかしいから」

《わかった。でも先に顔洗えオカッパ》

「うん」

泣いて泣いて、不細工なくらいに目を腫らしていたが、さっきまでの彼女よりはずっと彼女らしいと、ジインはほっとする束の間、数分後には彼女を僅かでも一人にってしまった事を悔いることになる。

近傍を取り巻く不穏な気配、完全に出遅れる。

マナの自室がある方向に耳を欹てた数秒後、着替え中の彼女の悲鳴に、その存在に気付くのが遅れたジインは、速力を上げ悔恨しながら壁と扉をすり抜けて飛んだ。

《ミスった!!——オカッ………》

マナを見つけた瞬間、ジインの視界が闇色に染まる。

《くそっ——ラヴィ……っ》

n
e
x
t

……ジンでホント変な精霊だな（笑）

君に降る雪

《ラクスを解放したのはアイツの妹だって話だ》

「二人いたよね、セネルガと…」

《ああ、ソレ。そいつの方。助けた兄貴に喰われちゃったが…まさに鬼畜》

死神の話だと、兄弟とはいえそれ程仲が良かった訳でもなく、捕らえられたラクスターファが、知能の低い妹のセネルガを言葉巧みに利用し、呪縛を解かせた後、生きたまま妹の心臓を喰ったらしい。

《セネルガは利口じゃないけど、ルシフェル様の飼い犬の一つだったから鍵の扱いにも慣れてた》

「鍵は智慧者が魔術で付けたの？」

《それはこの世界での事だ、詳しくは知らんよ。ケド、足枷はドワーフに作らせたグレイプニール、コレに限るらしい》

「貪り喰らう物…」

《ソレ。…なあんなかなあ、グリモワールと話すんのもって面白いワ。ついでに材料教えてやろうか？》

頼みもしないのに、死神はペラペラとグレイプニールの原料を話し出すが、それらはもう世界には存在しない物ばかりである。知っていて、わざと死神は語る。好意と脅嚇を突き合わせるのは、

死神の常套とも言える属性。

好感をいなく相手の反応を愉しむのだが、される方はとてもじゃないが親しみなど持てない。

《——それと魚の息だろ、最後は…》

「猫の足音でしょ」

灰鼠の瞳が、ギロリとラヴィを一驚して見た。深く裂けた口許からは笑みも零れる。

《愉快だよ。中々出遭えないねえ、ラヴィ・クラフト》

「性格の悪さはお互い様。残念だったね、僕それ持つてるから」

『お前は一度負けたことを、もう忘れたの?』と言われた様だった。

《わお。》

何処の世界で訊いても、極めて希少なグレイプニールを、あっさり持つてるとかのたまわくのも、やはりグリモワールの為せる業か。

《憎たらしいくらい、好きかも…ナンでしょう、支配されなくなつた》

「遠慮する」

即答されて、死神は高笑いする。

「それより、一番知りたいことがまだ訊けてない。ラクスターファ

が人間界に降りた理由、ルシファーから逃げるなら、もっと他にあらはらずだよな」

《そりゃアナタ、子供を産ませる為だね。少々危険でも、人が一番交じり合いやすい》

死神は出っ張った自分の腹を突き出し、更に空気を吸い込んで膨らますと、楽しみにラヴィに見せ付ける。

《恐らくは母親や妹の末路だろ。妊んだ人間共々喰っちまうって勘定。より力を付ける為にな》

「……それって、周期とか…あるの？」

《さあ？ 気に入った獲物はすぐに食わないで、唾つけとく習慣はあるがな。大本はケダモノだし》

「そう…か」

諸々の疑問が腑に落ちた様だった。ラヴィは手を翳して結界を解くと、最後にもう一度ナギを見詰める。

「死神、ちゃんと弔って下さいね」

《ケドさ、半分は自殺なんだよねえ…》

「死ななきゃならなかった人は自殺じゃ無いっ！、ナギは死神の君にすら話が出来ないんだ、だから……」

あまりに一瞬で、彼の中には何の思念も残されてはいなかった。

魂は砕け、最期に彼女を想うことすらもかなわず、けれども彼女だけを想い死を選んだのだから。

《分かった。やってやるよ、大事にすりゃいいんでしょ》

「じゃ、僕は…」

キンツ、と耳鳴りの様な音が鼓膜を打つ、ラヴィは話を途切つてそれに意識を傾ける。

ジンからだという事は分かっていたが、たった一度切迫した声で名前を呼ばれたきり、反応が無い。

「ジン！？」

呼び掛けながら、弾かれた様にラヴィは走り出す。

俄かには信じられないが、あのジンに危急する事態があるとすれば、その蓋然性はほぼ彼が心を許した者の手によるものと考えていいだろう。

——得てしてそれは、マナが危難に晒される事を告げていると思案するのが必然。

何者かが、いやラクスターファがマナを誘き寄せたのだ。

「ジンっ…！」

この失態を、お前はただ黙って服する性情ではないだろう？

(ジン…っ、気付いてっ——ジン!!)

向かうべき場所は知っている。

十年間——雪の降らないあの山へと、ラヴィは疾走した。

n
e
x
t

君に降る雪

じき、暗闇がやって来る。それを合図に暗然を好むモノらは始動する。

一刻どころか、一秒だって無駄に出来ないが、村を抜けた所で数人の村人が話しているのが見え、その中の一人が駆け寄り、ラヴィを呼び止めた。

「君はマナと旅をしていた……」

「ラヴィ・クラフトです。ラヴィ、と」

先程教会で話したオルガという男性だった。

「マナを呼びに行ったんだが家に居ないんだ。ひょっとしたらマナの居場所を知ってるんじゃないかと思ってね」

「マナは、多分あの山へ…僕これから行ってみますので」

ラヴィの指す方に目をやる。雪の降らないあの山を見ながら、オルガは呟きにも似た声で訊ねる。

「何か…ある。そう言うことなのかな？」

漠然とした質問に、ラヴィは頷いて答えた。

「オルガさん、村で待ってて下さい。マナは僕が」

「ラヴィくん、君はナギと同じ術師で、この先は私たちの踏み込め

ない領域だと？」

「その…はい。必ずマナを連れて帰ります」

男目にも美しいその少年は、瞳を真っ直ぐに向かわせて伝えると、口許をきゅつと結んだ。

「——君に、委ねよう。馬には乗れるかい？」

「貸して頂けるんですかつ、助かります」

「いや、こんな事くらいしか…急ごうっ」

彼の家に向かい、走り出す。途中オルガは何度か詫びる様に謝意の言葉をラヴィに述べた。

「ナギのことなんだが…いや、今は…ラヴィくん済まない、村人でもない君にこんな」

「いいえっ、マナとの約束の為にもあの山は避けられません。同じ事ですょ」

「約束って、雪を降らせる？」

「はい——僕、精霊使いなんです」

「それは心強い。彼女を頼みます」

着くとなり、オルガは厩舎から一頭の馬を連れ出して、ラヴィに手綱を預けた。

「夜暗にも脅えない賢い馬だ。あの山は途中までなら道が引かれてあるから、役に立つだろう」

鹿毛のそれに騎乗すると、ラヴィは手綱を引いて首をポンポンと撫でる様に叩く。

「ありがとうございますオルガさん…じゃ、行つてきますっ」

遅れを取り戻そうと、ラヴィは脚で馬腹を刺激し駈足で村を後にする。山道に入るころには、最大速度で駆けながら、もう一度ジンに呼び掛けを試みた。

「——ジンっ…何で返事しないんだよっ」

彼が、火の精霊が主人に応じれない理由。幾つかあるが、今一番に考えられるとすれば、それは恐らく——

「水、か」

手綱を握る手に力を込めて、ラヴィは処決した。

「悪いけど、僕の精霊に常軌は通用しないよ、ラクスターファ」

片手を左胸に、脳裏で唱えるのは厳命。抗えない事で、置かれている状況に相殺以上の効力を作り出す。

「私の命に応えよ——ジン・ジークバイド・アクライネ」

その威令に後味の悪さを覚えて、ぎゅっと胸を掴まれた様だった。

「ジン」免…っ、好きなだけ悪口言っていからっ目を覚まして
っ」

もう一度強く、何度も彼に呼び掛ける。

「ジンの馬鹿っ！起きて根性みせてよっ！！ジン…っ！！」

《……っえ》

「ジンっ！？」

《酔った。水じゃねーし、コレ》

「お酒？…じゃなくてっ、僕の声聞こえてるのっ！？」

《るさいっ、大声で呼び過ぎっ馬鹿ラヴィっ》

「良かったあ…じゃ、早速だけど状況説明して」

《ムリ。真っ暗だし、まずここから出なきゃならん》

「出られる？僕もう少し掛かるんだけど、マナを守って欲しいんだ」

《力貸せ。期待以上に挽回してやるから》

いつもの彼らしい言葉に、ラヴィは安堵し笑みを漏らす。

「いいよ。好きなだけ使って」

n
e
x
t

君に降る雪

薄墨の体色。頭から肩にかけて、白銀のたてがみを持つ肩高二メートルの大才オカミは、その禍々しい個体を人の容へと転換させた。

『待ち兼ねたぞ。黒衣とは時宜に見合ったものだ、予にこそ相応しい花嫁であろう』

ラクスターファが用意した体は、瑞々しく隆々とした肉付きを持つ青年であるが、暗紅色の瞳はまなじりに酷薄を思わせる程に冷たく纏わりつく様に少女を捕らえた。

『娘、甚だ愉快的な土産を持参したらしいな』

吊り上げた口角は、ラクスターファの猛悪なそれを彷彿とさせる。娘、と呼ばれたマナは、無表情でただそこに立っていた。意思を支配され、感情は失われて言葉も発しない。

マナの傍らにある壺に視線を落とし、舌をなめずり鼻を利かせる。

『気の利くことだ、酒に漬けてあるらしい…どれ、喰うてやろう』

長い銀の髪を引き摺る様にして歩み寄る。

闇の王にも厭われ、永い時に渡り自由を奪われていた残忍な魔物は、高揚する心身の快さからすでに酔っている様にも思える。

『んん？』

壺の蓋が僅かに動き、ゆっくりと振動して全体が震え、大きく揺れだした途端壺が宙に飛び上がった。

『何だ、壺が——支配者かつ!?』

火属最大の弱点とも言える水。それが酒であれ同じ事で、どっぷりと浸かっているサランダーに活力がまだ残っているとは思えず、強いて支配する者が術を行使しているのかと、聴覚を研ぎ澄ますが辺りには何も感じられなかった。

『実際…面白い品物よ』

嘲笑するラクスターファが見上げる壺。強度が限界をむかえ、ぱんと碎けて中の酒ごと霧散した。

《屈辱っ! ジョーダンじゃねえっ》

口を開くや否や、ジインは真下を睨み付け吐き捨てる。

『元気なチビだな。』

初対面でいきなり禁句をさらりと言われたのは初めてだ。

増幅されたこの怒り、どうしてくれよう?——ジインはマナを見付け、無事を確認するとラクスターファの眼前に降り立った。

《オマエ? ラクスなんたらって犬は》

プライドの高さでは両者引けをとらず、眉尻をクイツと上げて、ラクスターファは鼻で笑った。

『フンッ。真っ赤だぞ、酔ったのか? いいご身分だな精霊』

《犬が相手だからな。丁度いいだろ》

『はっ。犬とオオカミの見分けも出来ないのか、情けない』

《だってオマエ、今オオカミ違うし》

この減らず口が。このまま皮肉り続けても、埒が明かないと言葉を改める。

『つくづく、愉快な。どういう仕掛けだ？何故壺から出られたのだ？』

《馬鹿か。オレ様が凄いからに決まってんだろーがっ》

冷静に話しても、一方的だと不快極まりない。ラクスターファの眉は更に吊り上った。

『——お前の様な奴は、冥府にもいないよ』

ザンツ、と空を斬る衝撃がジインの鼻先スレスレを走った。

『かわしたか』

《かわすわっ、鼻がちょん切れるトコって——おいおいっ！》

ジインが話し終える間も与えず、ラクスターファは見えない刃を矢継ぎ早に打ち付ける。

ギリギリで避けると、後方の木々が両断されて、轟音とともに倒れた。

『支配者がいなければ、精霊なんぞ出来ることは知れてる……ケリを付けようか』

《言つたろ？オレ様はスゲーェんだよっ！！チビつて言つたこと、後悔させてやるよ馬鹿犬っ》

すつ、と手を翳し、ラクスターファは暗紅の両眼を閃く。同時にジンンは急上昇すると翻し、直ぐ様急降下した。

《ラヴィっ！頼むぞっ》

朱色の塊は、火焰となって紅翼を大空に広げる。総身を業火に包み、真紅の大鳥は嘴をラクスターファ目掛けて衝き立てた。

『ナルホド…口ばかりではないと言う事か』

《チツ、かわしたか》

『かわすだろ。にしても…お前の支配者とはバケモノか？』

未だ姿を見せない精霊使いに、やや興味を持って暗夜をはためくジンンを睽目した。

《はあ？バケモノだって？？》

力は然ることながら、この口煩く、自尊心の塊の様な精霊を靡かせたのだから、相当な使い手であることだろう。

《アイツはバケモノなんて可愛いモンじゃねえーよ》

『なに?』

《とんでもなくヘンテコリンで、どーしようもないくらいお人好しの馬鹿者だ。アイツは》

n
e
x
t

君に降る雪（後書き）

……その頃のラヴィくん。

「うう……ジインのばか。悪口言っていって言ったけど、敵相手にあんなにいっぱいヒドイや……ぐすっ」

ジインの声はラヴィに丸聞こえだった（笑）

君に降る雪

ここは、なだらかな斜面に建てられた祭壇らしき場所のようで、少し奥には社っぽいものが見える。そこへ続く道の両側には松明が焚かれ、その灯りが暗くなつた周りの景色を薄らに浮かび上がらせていた。

《トニカクっ！！そのオカッパ娘は返してもらうつゾ》

ジインは紅蓮の羽を広げ、後ろにいる数十匹のオオカミを威圧しながら、ラクスターファに告げた。

『やらんよ。その娘は予のモノだ、十年…こんなむさ苦しい場所で熟すのを待つてたのだからな』

《そんなモン知るかっ！とつと地獄に帰れっ、オマエがのさばってるから雪も降らねえんだっ、大迷惑だっ》

《寒いのは、苦手だね……ああ、蹄の音が止まった。着たようだ、よく喋るインコの主人が》

間も無く、斜面から顔を現したラヴィは、ジインを見るなり手を振る。

「ごめーんっ、ジイン遅くなつた」

『なんだか…拍子抜けのする奴だな』

微かに鼻で笑われたのが聞こえ、ジインは地面を爪でガリガリと引

っ掻いた。

《オマ…馬鹿ラヴィっ、気の抜けた登場しやがってっ！正直恥ずかしいんだよっボケっ》

「ええ？」

バタバタと走ってくるラヴィを、ジーンがぶつく言いながらも迎えた。

「マナはっ？」

きよろきよろと辺りを窺って、マナを見付けるとまた走り出す。その間、自分には目もくれないラヴィに、ラクスターファはギリギリと歯を噛み合わせる。

『成程、ナメているのか。ワザと』

《っーか、オマエが眼中にねえーんじゃね？》

「そんな事ないよ。ラクス、僕はお前を送還しに来たんだから」

目線を彼女と同じ位置に合わせるが、マナの瞳は何も映していないのか微動だにせず、ラヴィは両手を取ってぎゅっ握る。

「——それに、見なくても分かるよ」

『ふうん？どんな英雄気取りが来るのかと、楽しみにしていたんだが…若いな』

まだ子供じゃないかと、ラクスターファはジインを間に挟んだまま品定めする。

『だが、力は先程見せて貰ったよ。その資質にはガキもないか』

「そうだね、侮ってもらっては倒し甲斐がない」

『言うね。精霊使い』

ここでもうやくお互いを正面に捉える。ピリピリと張り詰める空気が、双方に纏わり付いた様に重く押し掛かり、然しながら感覚は研ぎ澄まされていた。

『娘はやらんよ。このラクスターファのものだ』

ニヤリ、嘲笑を合図に全てが動いた。

牙を剥き出し、飛び掛かってくるオオカミらをジインは双翼で払い、そのままラクスターファに向かって火焰を放つ嘴を大きく開けた。

『いいのか——殺してしまうよ？オマエの主を』

《ナニほざいて…っ》

言い掛けて、ジインは燃え盛る朱色の双眼の勢いを落とし、ラヴィに視線を向ける。

『一番賢いやり方だろう？』

「——っ……マ、ナ…っ」

ラヴィの首に両手をかけたmanaが、無表情のままその指先に力を込める。

《ばっかっ！へまってんじゃねえよっ！！》

『よく言う。オマエも同じ手にかかっていたじゃないか？オウム』

《クソがつ！！ナンとかしろっラヴィっ！女相手に力で負けてんじやねえっ》

『無理無理。そんなか弱いものではないよ』

《……しゃーねえ、なら堪えてろ。オレ様が片つけるまでな》

ラクスターファは失笑する。本当にことごとく定石の通用しない、この火の精霊に。

『中々面白いが、予は戦いを好まない。オマエとやれば、服も髪もコゲてしまいそうだからな』

《今更フザけたこと言ってんじゃねえよっ、ボケ犬っ》

『——娘は自害だってやるよ？舌を噛み切れと命令しようか』

「ジイ……んっ、まっ……て……」

何か勝算があると言うのか？ラヴィの言葉に、ジインは黙してラクスターファに眼光炯々と睨みを飛ばす。

『その娘はな、この世界に降り立って腹を空かせた予が、最初に喰

うてやった人間の子供だよ』

「…ラク、ス…っ」

『娘を助けると命乞いをしてきおった。夫婦とも立派な呪術師だったらしいが、虚しいものだ』

「やめ…ろっ、マナの…前で、はな…し…をっ」

『育てて妊ませてからと思い、この山に連れて来たがどうにも人の子は……そうしたら、山護りとか言うあの男が代わりに育ててくれるって言うじゃないか』

「や、め…っ」

『だから期限付きで頼んだのに、今になってやらんとぬかしおって—だから殺してやったよ』

「ラクス…っ！…」

『娘は予の物だ。十年も前からな』

首を締め付ける手は緩まない。なのに、表情の無い彼女の目から零れる一筋の涙は、心の痛みをラヴィに訴えている様だった。

「——お前には…やらな…いつ」

マナの両手を掴んでいた片方の手を、ラヴィは口許にその人差し指を噛み切った。

「マナは…っ、」

指から溢れ出す血液を含み、その手を今度は彼女の後頭部に回して
顔前に引き寄せる。

「——僕が、もらっ」

唇が、触れた。

n e x t

君に降る雪（後書き）

その頃……ククル村では。

神父様がラヴィの為にベッドメイキングしていた。
そして、何故かそれはシルクのシャツだった（笑）

ラヴィ、帰っても危うしっ（^ー^；）

君に降る雪

『なっ!?!』

強引に口付けを交わすラヴィに、ラクスターファは形相を変える。
獲物に対する執着と、酷くプライドを傷付けられて、得も言われぬ
怒りに周りの空気が震撼している様だった。

《あれは怒るわな。オレ様でも》

「……マナ、君は…ナギの意志を…継ぐんだ、ろ?…負けちゃダメ
だ——マナ…っ!!」

『娘っ! そのガキを絞め殺せっ、生きたままと思っただが…助けに来
た娘に殺される屈辱を味わって死ぬがいい精霊使いよっ』

《ばあ〜かつ。オマエの負けなんだよ、すでに》

鋭い爪を突き出して視界を遮ると、ジインは意地悪くラクスターフ
アに物言う。

『黙れっ! 遊びは終わりだっ、いつまでふざけてるっ! サラマンド
ー』

《全然っ、ふざけてないんだけど?》

『ええいつ、鬱陶しいわっ! 足をどけろっ』

《見たい? けどよ、今頃仲良く抱き合っちゃったりしてんじゃね?》

『馬鹿なっ、あの娘は予の傀儡なのだ、か……ら』

すると、マナの両手は首から解け、そのままラヴィの胸元に顔を埋める。ゴホゴホと咳き込みながらも、彼女をしっかりと抱き止めて何度も頭をポンポンとあやす。

《……ほらな？言っただろ。あーあ、プライドズタズタ》

しかし、まあ本当に抱き合っていたとは。こっちは高慢な犬の相手だと言うのに。

「……んーっラヴィつぐるじい……」

「わあっ、ごめんっ……つい」

勢い余って押し付け過ぎた。慌てて彼女を放すと、そこには上目遣いに涙をいっぱい溜めたマナがいた。

「血の味が……ラヴィのが苦しいよ……あたしラヴィに……ごめんなさいっラヴィ……っ」

「無事で良かったです。マナは悪くないよ、僕が側を離れたりしたから……でも、もう終わりにするから」

「ラヴィ……」

比類なき精霊使いは、その凜然たる翡翠の瞳になおも美しくも強い微笑みを湛え、勝利を約束する。

『——人間如きに、舐められたものだな』

ラクスターファの怒りは、空を裂く刃となってラヴィへと向けられる。

「マナ、彼は」

彼女を背に、ラヴィは手を翳し、事も無げにそれを薙ぎ払う。

「今は人の形をしていますが、真の姿は闇の王すらも厭うオオカミ……人の血と肉を好み、数多を爪牙にかけたケモノです」

『予の獲物に手を掛けた事、後悔させてやろう精霊使い』

「ラヴィ……分かってる」

ぎゅっと、ラヴィのコートを握り締め、マナはそれを見据える。

「聞こえてたから……私の、両親——ナギを殺した魔獣」

「名はラクスターファ。その血肉は人を殺め過ぎた罪で、毒を放ちあらゆる物を腐敗させる」

『へえ？よく知っているな、勉強熱心なことだ』

ゆらり、転換させた姿形を変え、ラクスターファは本来のオオカミへと戻る。

「だから、残念だけど仇は討てない。山も里も穢れてしまうからね——二度と人の前に現せない様に闇の世に還します。それしか手

立てがない」

マナはただそれに、しっかりと頷く。

《なあ。とりあえずさ、焼くだけ焼いてからにしねえか？返却は》

不完全燃焼のジインは霊鳥の器を持て余す様に、その翼をバサバサと広げた。

「悪いけどジインは下がって。——ラクスは僕がやる」

《…………へえ。珍しい》

「ええっ！？この大鳥、ジイなの…？」

かなり残念だが、これは見物だとあっさりと身を引き、マナはそのジインの姿に目をぱちくりさせた。

『不愉快だよ。精霊使いが精霊を下がらせるなど、殺してくれと頼んでいる様なものだ』

「そうでもないよ？ラクス、言ったよね——僕を侮るな」

『人間風情が…っ！！いいだろうっ、望み通りにしてくれるわっ！』

《さっきから思ってたんだけど…あれって挑発？アイツわざと犬を怒らせてる？》

「そうなの？あたしは分かんないけど、だけどジイが戦わなくて大

丈夫なの…かな？」

《ああ、ソコ？余計な心配ってやつだ。アイツは精霊も、ただ操れるに過ぎない。アイツの本当の力は……まあ、あれだ。歩く魔術書わおっ！なんてピツタンコな言葉っ、流石オレ様》

こんな時に悠長に自画自賛して、ジインはケツケツケ…と、不気味に笑った。

「……？よくワカンナイんだけど」

ジインの言う通り、狡猾なこれに冷静さを欠かせ、獣の本能のみで喰らい付かせるのが狙い。

「——聞こえぬ音は右に閉じ込め、動かぬ物の左足を切る」

後ろ手に、ラヴィは背中に隠し持つ物った物を手に握り、精彩の術を唱える。

「息せぬ者に息を吹きかけ、蓄えしそれを編む者に——」

習性の利用。獲物には、最初にその利き腕を喰いちぎり、血肉を味わうのがラクスターファの常套。

「狩られたその舌根を絞らせる」

『何を詠んでるっ、そのような時は与えんよ人間っ』

接近——それこそが狙い。

寧猛な獣が牙を剥き、その口を開けて肉に食い込む。鮮血が飛散した。

n
e
x
t

君に降る雪（後書き）

その頃、ククル村では…………。

やっぱり神父様が、ラヴィの為に晩ご飯の用意に励んでいた。

ますますマズイぞっ、ラヴィ（笑）

っーか、お葬式の準備しろ、神父っ。

君に降る雪

獰猛な獣が牙を剥き、その口を開けて肉に食い込む。鮮血が飛散した。

「——くっ……」

白銀のたてがみに身を埋め、ラヴィは眉を顰めて激痛を遣り過ぐす。

「ラヴィ…っ！！嫌…っ」

《ちゃんと見てろオカッパ…オマエの大事なモン奪ったヤツの顛末だ》

両手で顔を覆い逸らしてしまったマナを、ジインが窘める。

これはお前の為の戦い。目を背けるのは無礼だと、懸命に堪えてマナは頷き、目前を見詰めた。

『——何か術を仕掛けたか…？千切れんよ。しかし、一時凌ぎに過ぎん』

食い千切ろうとする腕を捻り上げる。シャツとコートが裂けて、ボタボタと零れ落ちる血が地面を濡らした。

「い…っ、腕の方は時間無かったから、ね…テキトー。でもそれで構わない」

ギリリ、睨め付けるラクスターファの血色に底光りする瞳は、それだけで毒を含んだ様に禍々しい悪性でラヴィを晒した。

「猛悪には精悍なるモノの力を……以ってそれを——絡げる」

最後の一文を唱したところで、ラクスターファは思惑に気付き、腕に喰らいついた大口を引き離そうとした。

「——行かせないよ、まだ」

その歯牙に食い込んだままの左腕が動かせると分かり、ラヴィはラクスターファの靡く体毛を掴み取る。

「名は体を表す——有様を、グレイプニール」

右手に持つ一メートル程の帯状の革紐が、ギョーンと撓る様に音を立てて長く伸びた。

『……お前は……っ』

「偶然持ってたんです、僕も『貪り食うモノ』を。お互い運が良かったね」

痛みに表情を歪めていたラヴィは、輪をかけてその自尊心を砕くかの如く、これでもかここで相好を崩した。

『おのれ……っ！！グリモワールがっ！！』

「奇跡でしょ。二度もグリモワールに逢えたんだから……運がいいよ、ラクスターファ」

ラヴィの手から離れた捕縛する刑具は、瞬時にラクスターファに絡

み付き、自由を奪われてその場に横倒しになった。

「足枷って言うけど、体中に巻きついちゃうんだ、コレ」

自分で縛っておいて言うのも何だが、かなりきつそうである。

「ラヴィ…っ！」

強張った顔のまま駆け寄るマナに、微笑みで返した。

「あたし…っ、ありがとう……ラヴィごめんね、ありがとう」

何度も有難うとご免を繰り返すマナに、ラヴィは頭をポンポンと叩いて大丈夫だと答える。

「だいじょぶ…じゃないよっ、傷見せてラヴィっ」

「だめ」

隠す様に左肩を引いて、足許に横たわりまだ牙を剥くラクスターフアに視線を移した。

「ラヴィっ」

「見ない方がいい——それより、仕上げるから」

『グリモワール…名を、言え』

「……ラヴィ・クラフト」

『覚えておこつ』

「そんな必要ないよ。二度と脱獄出来ない様、ここへ来るまでにコレでもかって言うくらい、有りと有らゆる呪術をグレイプニールにかけといたから」

『…性質が悪い』

「よく…言われるよ」

《おい犬っ、後ろで威嚇してるオマエの手下っ、鬱陶しいから何とかしていけっ》

『知らん』

《ナニイーっ!?!?》

軽くあしらわれた感が何とも腹立たしい。最後までスカン奴だとジンが焦れる。

「ジイ、オオカミならこの魔獣が消えたら散り散りになるんじゃ」

《なるかよっ! コイツらはただのオオカミじゃねえ、弱えーケド魔物だっ》

『フン、予は何もしておらん。お前の血に魅せられてるんじゃないか? ラヴィ・クラフト』

「——そう、だね。ジン、灼き払っていいよ」

《え、マジ？》

「うん。ちょっと、急ぐから」

《……マズイのか？》

「なんとか…ラクスつて唾液にも毒があるの忘れてたってゆーか、血も流れ過ぎちゃったしって…はははっ」

《阿呆だ。やっぱり》

にべもないジインの言葉に口許を緩めて、ラヴィは一つ吐息を零した後、後方に蒼い光を放つ魔法円を浮かび上がらせる。

「マナ、ラクスターファを送還します……何か言っておく事とかある？」

「——ない。言いたい事なんて、有り過ぎて無いわ」

仄かに蒼光を受けたマナの表情に、ラヴィはその瞳の持つ猛々しさに敬意を込めて頷いた。

「強いね、君は……じゃあ、始めるよ」

つつと立てた二本の指に光芒が一閃し、それはそのまま円の中に描かれた六芒星に吸い込まれる。

「開いたよ、扉」

『なら、さっさと突き返せ』

「……釈然としない。やけにあっさりしてるよね、もう一暴れして僕を弱らせる時間稼ぎくらいするかと思ってたのに」

『やって欲しいのか』

「困る…んだけど、ね」

『グリモワールが厄介なことは百も承知している——結局、何をしたらってその名を継ぐ者には勝てぬことも、だ』

「……ラクスって」

小首を傾げて、ラヴィは考えを巡らす。

「グリモワールと出遭ったのって二度じゃないの？」

『やかましいわっ、とつとと術を執行しろ…っ』

「二度じゃ足りなかったのか。そうなんだ、奇縁？ 因縁？ …あ、両方か」

『阿呆が。これだから嫌なんだ、グリモワールは』

含み笑いに、ラヴィは返戻の術を完遂させる。

「幾度か。でもこれが最後です。魔王の懐へ——ばいばい、ラクスターファ」

n
e
x
t

君に降る雪（後書き）

……えっと、豆情報ですが、ラヴィの利き手は左なんだな。
とゆーか、両利き。うさこと一緒なのさ。

君に降る雪

辺りは元々の静寂を取り戻した様に、灯りの届かぬ場所は帳に覆われる。

「い……てっ……サラ呼ばないと無理かな、これは」

ちらつと傷を見て、ラヴィは気持ち悪くなる。

「見なきゃよかった……うえー」

「ラヴィ……」

彼の身体に触れていいのか、どうか。彼女らしからぬ間誤付きで、マナが名前を呼んだ。

「マナ、終わったよ……えっと、帰るのちょっと待って——あ……れえ」

「ラヴィ!？」

彼女に歩み寄ろうとした足がついて行かず、へなへなと膝から崩れる様にしゃがみ込んだ。

「大丈夫っ!？」

「あーうん、毒が足にきちゃったみたい? はははっ……ごめんねー、ドジで」

何でそこで笑うのかと、本来の彼女なら突っ込むところだろうが、マナは予想に反して潤ませた瞳でラヴィを見詰める。

「あ、あのねっ、平気だからっ…精霊がスパッと治してくれるからっ…えっ」と

本当に予想外だ。

これは対処に困ると、ラヴィはあたふたとマナとにかく話を続ける。

「そのっ——ナギも、マナの本当のご両親も、きっとこれで安心したんじゃないっ」

首を横に振って、マナは膝に置いた両手でスカートをぎゅっと掴んだ。

「ああっ僕っ？僕なら、なんてゆーか普通だったら死んじゃうかもだけど…じゃなくて、そーじゃなくて…えっと頑丈なんです、だから……マナ」

幾ら強がってても、やっぱりまだ十四歳の女の子なのだ、彼女も。

「——大丈夫。もう全部終わったんだ……だから、いっぱい泣いていいよ」

「……ラヴィっ」

《ヒジョーにマズイっ！！》

「わぁっ!？」

いきなり、元のサイズに戻ったジインが間に割って入り、ラヴィは硬直しマナは目を丸くした。

「びっ…びつくりした、何っジイン」

《イチヤついてるバイじゃねえっ…犬がとんでもない置き土産して行きがったっ》

「いつ、いちゃついてなんか…っ」

「そっ、そだよっ…ラヴィが足とられちゃったから、それで」

《そこに着眼してんじゃねえっ!!樹が腐ってきてんのっ、山が死んじまうっ》

「え…」

立ち上がり、マナはジインの指す社のある方へと駆け出す。辺りにはオオカミの死骸がばらばらに横たわり、目に見える早さで腐敗して行くのが分かった。

《立てるか?ラヴィ》

使える右手を地表に、ラヴィは身を起すとフラフラと歩き出した。

《おい、先にアイツに治してもらえっ》

「そんな時間ない——何故灼かなかった?ジイン」

彼らしからぬ抑えた口調に、ジインの耳が若干垂れ下がる。

《燃やしてやるーと思ったらもう死んでたんだっ、それにオマエあんま遣り過ぎると怒るじゃん》

「——灰燼。今すぐやって、フォローはこっちでするから」

《…わかった》

見据えて告げるラヴィに、ジインはそれ以上は何も言わず命令に従順する。

（しつかりしろっ、自分っ）

上手く動かない手足に言い聞かせ、後悔している間など無いと、結んだ唇を切る程に強く噛んだ。

「マナっ、僕の後ろに居て下さいっ！そこは危ない」

「ラヴィ、山が…ナギの護ってきた大切な山なのに…っ」

「マナっ、今は下がって！」

ラヴィの厳しい口調に、マナは驚きながら両手を口許に歩みを寄せる。

「——」
「ごめん」

すれ違いざまに一言だけ言っと、ラヴィは風光にあったはずのその

場所を見渡して、大きく息を吸い込み、静かに吐き出した。

「全く、グリモワールが聞いて呆れるっ——我が命を聴けっ、これより統べる者よ……リリィ・ルウ、水流の恵みを与えよ、ジル・フェンルーガ、風の福音に降り立て……サラ・サ・リーファ、大地に加護を齎せっ」

支配者の呼応に眼前の空間が細かく揺れ動き、精霊たちは応諾を返す様に光輝を放ちラヴィの前に顕現した。

「僕の力、充分に使えますか？」

《相変わらず……我が主は傷だらけですね》

涼しげな碧の瞳。金の髪を棚引かせる風の精霊が、頷きながら言った。

《体温八度五分。出血は多いし脈も速い——ラヴィ、私は貴方を優先したいのだけど》

触れることなく。多分言い当てられているのだろっ、その美しい容貌の眉根を寄せるのは土の精霊。

「駄目。サラに一番活躍してもらわないと、樹木の再生です。僕は後でお願いします」

《……貴方の、思うままに》

《サラは主には素直だなあ》

《当たり前でしょう、支配者に愚直でなくてどうするの……振る舞うわ、ラヴィ持ちこたえなさいよ》

「うん、ジルもルウも行つて——腐食を止めて」

《もとより、前よりも美しい山にしてあげるわ…貴方の望みならね》

「よ、宜しく…おねがいします」

あれは絶対怒つてる。後が怖いなあ…と、ラヴィは思った。

「目がチカチカする……ラヴィの精霊たち、よね」

「うん…マナさっきはゴメンね、それと今からもちよつと会話出来ない」

「ううん、わかっ——」

瞬間、突風がラヴィの身体を包み、巻き上げる様に髪が舞う。

「——地に界す数多の精霊に命ず、風に踊り粒子を帯びて光彩を照らし召せ」

マナはその光景に目を瞠ることしか出来ず、口がぽかんと開いてしまっていることにも気付かない。

夜の暗闇に覆われたこの場所に、光の粒がフワフワと風に乗って辺り一帯を照らし出し、幻想的な世界に立っている様な。

「キレイ…」

不謹慎かも知れないが、本当にそう思えた。

こんな奇跡を起せる彼にも、もう羨ましいとか負けたくないなんて、次元が違い過ぎて遠くへ飛んで行ってしまった。

「……ラヴィ」

代わりに、その整った彼の横顔に、マナは胸が締め付けられる思いがした。

n e x t

君に降る雪（後書き）

豆話。

えっと、サラが生きてる頃の話です。

「死んだんぢやねえのかよっ」とか突っ込まないように（笑）
本編のちよつと前のお話なんです。

さてさて、マナの淡い恋心……。どー転がるんでしょうか。

あ、転がる前にサラ様に踏みにじられそうっ（、3、）

怖っ（笑）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6691i/>

『翼～』番外編**君に降る雪**

2011年10月4日19時39分発行